本誌の特色

本誌は全國鐵道の停車場に備置きあれば其廣告は全國の公衆一般に知らるゝ便宜あり

目次

篇章

一、5、光明裡の生活　山根顯道

一、4、妙莊嚴王　古定賢正

二、3、釋尊の本意　原田容廣

八、5、先づ自己を知らざるべからず　清瀬日憲

九、1、本佛の大慈悲に依りて得たる大功德　井村恂也

十一、2、聖祖の對外警策吾人教徒の對外警策　鈴木暲學

日什聖人置文諷誦章卷上　坂本日桓

岡山法戒記　雜報

光明裡の生活

山根顯道

懺悔的發心と云ふ科題を得ましたが、懺悔と云ふ術語に就て摩訶止觀の七の卷(七十貳帋)に、懺をは先惡を陳露するに名け、悔をは往を改め來を修するに名くと說てありまして、此定義を解釋して見ますると、先惡とは過去世及び今生に於ける既往の總ての罪惡即ち煩惱的所業を指し、陳露とは又は發露とも申しまして、罪惡を本尊の御前に一切合財さらげ出して、顯露に陳謝し明白に發表すること、來を修するとは佛陀大悲の所業を慚愧して悔ひ改ひること、往を改めとは既往の護念の下に、自今已後淨き身心に立還りて光明ある生活に入り得ること、則ち永世不死の門に入ることを指すのである、それから又發心とは無論發菩提心のことで、發信心とも發淸淨心とも云ひ得らるゝが、一言に云へは、吾人凡夫の本具の佛性が或る動機に接して芽を吹き出して來たことを名けた術語である、

て、吾人が此菩提心を發す處の動機と云ふものは澤山ありまして、感應的發心、實在的發心、神秘的發心、懺悔的發心、道義的發心、推理的發心等、種々なる方面よりしてこの菩提に近寄つて來る事になつて居ますが、中にも慚愧の心の油然として涌き出ると同時に、懺悔して發心する此懺悔的發心なるものは、發心に就ての大多數大部分を占めて居るのであらうと思ふ、

世人は懺悔と申しまするとすぐに罪惡を懺悔すると云ふ簡單なる意味にのみ解釋し、隨つて其罪惡とは殺人犯とか、强竊盜とか、乃至は奸婬罪とか申す樣な、或る格段なる罪科を犯す事の樣にのみ考へて居るが、是は畢竟素人考であつて、罪惡と云ふ文字の中には、無論此殺盜婬の三は含んで居るに相違ないけれども、唯そんな眼に見へる事計りではないので、佛敎經典に顯はれたる罪惡とは、頗る廣義的に解釋せられ、總て菩薩以下の九界の衆生の特性たる、煩惱とそれから煩惱の動作即ち業と、及びその二つのもの〻因緣相依りて生ずる苦惱煩悶のすべてを包含して論ずるのである、

ですから經典に數々十惡とか又は六根の罪と云ふことが說てありまず、まづ十惡の方から申しますと、殺生と申して殺伐爭鬪を好んで凡ての生物を殺害すること、偷盜と申して我物ならぬ他人の所有物を盜み取ること、邪婬と申して定まれる夫婦の外に正しからぬ婬事を行ふこと、此三を身に行ふ犯罪の重なるものとなし、次に妄語と申して虛構の事實を眞實らしく演べ立て、他人の迷惑を惹起すこと、綺語と申して益にも立たぬ無駄口を叩き、爲に惑亂の種を蒔くこと、惡口と申

して他人の身の上の誹謗譏誣をなすこと、兩舌と申して或る一個の事實に就て反對せる二樣の辨明をなし、爲に人をして容易ならざる迷惑損害を招かしめ、又は人と人との間を疎隔せしむること等、此四を口より生ずる罪惡の重なるものとなし、次に貪欲と申して慳貪邪見にして物のあはれを知らず、毫も慈悲心のなきもの、瞋恚を申して些細の事にも立腹して絶へて耐忍力なきもの、愚癡と申して物の道理に闇く我儘氣隨をのみ言ひ張り、兎角に思慮分別の淺きもの、此三を意に屬する罪惡の重なるものとしてある、

以上、身(三)と口(四)と意(三)との三業に經て十種の罪惡が經典に說示されてありますが、又別に六根の罪と云ふものが說れてある、六根とは眼、耳、鼻、舌、身、意の六でありまして、眼に諸の不淨を見て諸色に貪著し、耳に諸の妙音を聞て惑著を生じ、或は惡聲を聞て百八種の煩惱賊害を起し、鼻は香を貪るの故を以て貪著して生死に墮落し、舌に妄言、綺語、惡口、兩舌、妄語し、邪見の語を讚歎し無益の語を說き身は殺盜婬心は諸〳〵の不善を念ふて、十惡業及五無間の業を造ること猶ほ猿猴の如く又腦膠の如し、處々に貪著して遍く一切六情根の中に至る、此の六根の業、枝條華葉悉く三界二十五有一切の生處に滿てり(觀普賢經)とあります、而して衆生の罪は草の上の露の如く、智慧の日輪が一たび東天に上ればはら〳〵と消へてしまいます、故に大智慧大慈悲の佛陀に對つて、至心に六情根を懺悔すべしと說てあります(仝經)、

て、此六根の罪は約めて申しますと、身と心との二つになる則ち眼、耳、鼻、舌、身の五は身にして、意は心である、又身と口と意との三に配當してもよろしいのてある、

以上十惡と六根惡とを擧げましたが、これは畢竟重大なものゝみてあつて、若も巨細に調べて見ますれば、此外にまだまだ澤山あるだらうと思ふ、假令へは懶惰懈怠にして兎角に勤勉を厭ふとか、朝寢を好む宵寢好が時々起て居眠をするとか(身)、或は又、猥りに詭辯を弄するとか、毒舌を振ふとか(口)或は又、浮薄にして精神の散乱動搖するものとか、慢心强くして兎角他人を輕蔑して威張散すとか、嫉妬深くして他人の善事を嫉み惜むとか、兎角無精勝にして進取の氣象に乏しいとか(意)、其他種々雜多の煩惱的動作がありまして、殆んど吾人凡夫の當躰は煩惱を以て充され妄想を以て埋められつゝある、罪惡の結晶躰と云ふてもよいのてある、

一面から考察すると、吾人は斯る罪惡無量の凡夫てあるけれども而も他面から見れば十界互具の當躰てあるから、無論本具の佛性を具有して居るのてあつて、此具有せる佛性は或る一種の動機に觸れて、忽焉として其芽を吹き出すのてある、恰かも草木の種子を袋の中に入れて棚の上とか書籍函の中に仕舞て置た日には、何日まて經ても其儘に何の効能もないが一たび地に播いて水分と太陽の熱とを受ければ、直ちに芽を

吹き出すと同じてあつて、本具の佛性が芽を吹き出すのは發心である、懺悔は則ち其發心に就て、多大の勢力ある一種の動機てある、

て、茲に是非とも述べ置かなければならぬ一個重要の教義がある、それは內薰外薰と云へる法門であつて、內薰とは今申す佛性の開發即ち吾人心性の內よりして、時を待ち機を得て薰發するを云ひ、外薰とは佛陀の大悲常に止む時なく、衆生本具の佛性の開發を誘ひ、一朝機熟し時至りて內薰の欲發を見るや、すかさず救濟の御手を垂れ給ふて、外より之を將護し督勵して、首尾よく菩提心を增上せしめ給ふ、所謂加被の力、外よりの薰發てある、草木の種子が太陽の熱によりて發芽するが如くに、吾人の發心も此佛陀の護念に待つ處、實に多大のものてある、特に此懺悔に於ける徃を改め來を修すると云ふことは、常恒不斷に佛陀大悲の護念なくんば、到底成効は覺束ないのてある、今日懺悔して明日新たに罪を犯し、又明後日懺悔すると云ふが如き、形式的懺悔は權兵衛の種蒔と一般何等の効力もないもので、法華經に示されたる懺悔は左樣のものてない、內薰外薰函蓋相應の大懺悔、金剛不壞の大作法てある、

それから懺悔の狀態に就てお咄申しますが、或る處に非常の貪欲家がありまして、此人頗ぶる付の吝嗇家て以て、精々と爪に火を燈して貯蓄しましたが、

降る雪と貪欲深き人の身は
つもるにつけて道を忘るゝ

て、義理も、人情も、耻辱も、外分もなんのその、世間の彈指位は幾何喰づても蛙の面に水、唯モー眼中金錢あるのみ、けれども妙なもので、斯る人にも妻子はさすが可愛と見へて、どうか此財產を今數倍にして子息に讓りたいの一點張、然る處風邪が素因て碌々藥餌を與へない計りに、餘病を惹起して妻君は可惜黃昏の旅立ち、殘る可愛の頑是なき兒供は、乳離れの養養不良て俄然床に就ての大疾患、此上若しも此兒に死なれてはと、さすがの先生も忽焉として大に前非を悔ひ、慳貪邪見の罪惡を悉く懺悔して、殆んど生れ替りし如くの慈善家布施行者と成つた、

斯ふいふ事實は世間其例に乏しからずて、これ迄殺伐爭鬪を事とせし乱暴家も、一念發起して慈悲深き人となり、年中懈けて何等の勤務をも厭ひしものが、勃然として大々的勤勉家と打て替り、輕擧妄動浮薄極まる人格が、一大懺悔のもとに非常の謹嚴質實なる好人物と化する等、身口意三業のもろもろの惡動作を懺悔して、反比例に善蘊的態度と變化する類例は、隨分共世の中に少なくない、而もそれが法華經的感化の下になされたる場合に限り、決して餘他の宗教の如く再び逆戻りの憂がない、是れ畢竟するに、自己本具の內薰と佛陀慈愍の外薰とが、函蓋相應して此妙事が出來上るからてある、

今懺悔に就て最も名高き一例を擧げますれば、八宗の高祖と尊崇せられつゝある千部の大論師龍樹菩薩の傳記を調べて見ますると、菩薩は南天竺の婆羅門種族に生れた人で、天資非常に聰慧にして、三四歳の時婆羅門の僧侶が四韋陀と申す經典を讀むを聞いて、悉く之を暗誦じ、年十五六にして天文地理其他諸の學術悉く之に通せざるなく、其名天下に響き渡つたとある、然るに學友が三人ありまして皆是れ一時の俊傑でありました、或時龍樹は此三人に對つて申しますに、天下の義理以て神明を開き幽旨を悟るべきものは、吾等悉く之を學び盡した、此上は何を以て自ら娛まんやだ、よろしく情を聘せ欲を極むるのが、最も是れ人間一生の快樂であらう、處が我等婆羅門種族は到底王公の富貴には及びもつかないから、尋常一樣の手段では中々以て此情慾を恣にすることは不可能だか、唯茲に一つの隱身術なるものが有て、この術を得たならば巧みに身を隱すことが出來るから、王公貴人の邸宅に出入して心のまゝに情慾を遂げ得らるゝに疑なしと談じつけました、友の三人も何がさて血氣の若者それは至極結搆と一口返事で贊成しました、直ぐ其足で方術家の門に到り、悉くこの隱身の法を學び得ました、仍て四人相共に日の暮るゝを待ち、この術を行ふて自在に王樣の宮中に入り込みまして、美人と云ふ美人を手當り次第に侵犯しました、さて斯の如きことを數月間續けましたのだから堪らない、日數を經るに從ひまして宮中に懷妊の婦人が段々と殖へて來る、王樣も是は如何も奇怪だと云ふので、諸臣を召して何か其方達に心當りはないかと尋問になる、そこで或る智者と呼ばれた元老の一人が申しますには、是は屹度方術家の惡戲か、又は鬼魅の所業に相違なからうと思ひます、仍て之を退治しますするには、王城の門に細かい砂を撒布して置きますれば直ぐと判ります、若しその砂の上に足跡が現れたならば、それは方術家の隱身術を行ふものであるから、軍兵に命じて討伐せしむべく、若し又足跡がなくば、それは確かに鬼魅の所業に相違ないから、祈禱を以てその災禍を拂ふべしと、彼樣に言上しました、王樣は之を聞し召して可也と直下にその用意を命令せられました、一方龍樹の連中四人は此事を夢にも知らないから、相變らず夜に入りて例の通り忍び込みました、處が足跡が歴然と城門の砂の上に現はれたから、さてこそ曲物御參なれと、數百名の兵士が手に〳〵兵器を携へて十重二十重に押取卷きまして、打つ、切る、突く、擲ると云ふ始末で、三人は即死の運命に接しました、唯一人龍樹は身を歛め氣を屏けて、王樣の寢床の側に竊んで居ましたから幸に殺されなかつた、此時龍樹は大懺悔をなして廓然として「欲は苦の本禍の根、德を敗り身を危くすること皆これに因て起る」と悟りました、斯て自ら心中に堅く誓を立てました、若し此場所を脱れ得たならば、直ちに佛敎によりて得度すべしと、既にして首尾よく王城を脱れ出て、山に入りて一寺に到り、出家して戒を受け、九十日の間に小乘經を暗誦じた、斯くて更に深く佛敎を究めんものと、處々に尋ね行きて雪山の老比丘に遭遇し、茲に大乘經典を受けて誦受愛樂その實義を究め、尚ほ諸國を周遊して更に餘經を閻浮提中に求め、外道論師沙門悉くみな龍樹の爲めに摧伏せらる（縮刷大藏經第廿七套第二卷二二二葉）とあります、

又かの深草の元政上人は俗傳によると、石井常右衛門の後身であつて

人心松にひとしきものならば
常盤のいろをともに契らん

と詠せし音に名高き三浦屋高尾の非業の最後に半生の罪科を懺悔して、發心頓悟佛門に入りしとうたはれて居る、尤も常右衛門と元政とは全く別人だ、隨つて高尾太夫に關係は毫も無いと、反對の議論もあることだから、強て元政の前半生が常右衛門なりしや否やを穿鑿するのでもないが、兎もあれ元政は確かに江州彦根藩の武士であつて、或る懺悔の動機によりて發心したと云ふ事だけは、爭ひのない事實である、懺悔の事例は古今に亘りて際限なくありますが、今はまづこれ位にして置きまして、更に吾人信行家に必要欠くべからざる大敎訓のこもれる一首の和歌を紹介して、此說敎を畢ることに致します

立ち渡る身のうき雲もはれぬべし
たゐのみのりの鷲の山かせ

これは祖師上人が身延御隱栖の折柄、感興油起して詠せられたる御詠歌であつて、端書に『我身の內に三諦即一、一心三觀の月曇り無く澄けるものを、無明深重の雲引覆ひつゝ、昔より今に至るまで生死の九界に輪廻すること、此砌にしられつゝ、自らかくは思ひつゞけける』と記されてある、御詠の意は「はしがき」にも有る通り、九界の輪廻とて本佛大悲の御手より離れて迷界に沈淪せし吾人れ互の罪科、それよ際限もなく無明深重の雲に覆はれて、罪科に罪科を重ね、煩惱に煩惱を累ねて、何日はてしもない身の上てあるけれども、本有の覺の月はその雲の裡に確かに存在のだから、一念大懺悔をなし大反省をなして、本佛毎自の御誓願に縋り、法華の行法を辿るならば、衆罪は草の上の露の如く悠忽の間に消滅して、光明ある生活が出來るて、決定菩提の月は詠められるぞとの親情をれ寵め遊ばし、而も祖師御自身は斯る大決心の下に法華經の色讀實行を遊ばされ、人生のあらゆる艱難辛苦に打勝ち一難來る毎に勇氣百倍し、一害起る毎に慈悲心倍々加はり、終に成効の曉即ち成佛の必至も悅喜せられたる御詠歌と拜し奉らるゝのである、

て、吾人その法流を汲む信行家の生涯も亦宜しくその芳躅を學んで、忍耐、勇氣、確信、思慮、慈悲等凡そ祖師の御美德

と云ふ御美德を悉く摸範として、之を實行すべく心掛けねばならぬ、懺悔と云へばとて、決して意氣地なく腰を拔かして佛の前に低頭平身するが如き消極的動作は、斷じて日蓮門下の取らざる所、往を改め來を修すべく佛陀護念の下に、積極的大光明裡の生活に入るべきである、一たび無始已來の罪障を懺悔したる以上は、ゆめ背佛毀法の大罪を再犯せざる樣一たび本因妙位の安住を希求せる以上は、ゆめ退本取迹の魔族に魅入られざる樣、今身より佛身に至る迄、南無妙法蓮華經の光明界裡の人となるべきである、

聖語

夫れ鍼は水にしづみ、雨は空にとゞまらず、蟻子を殺せる者は地獄に入り、しかばねを切れるものは惡道をまねかれず、何に況んや人身を受たる者を殺せる人をや、但し大石も海にうかぶ船の力也、大火を消す事水の用に非や、小罪なれども懺悔せざれば惡道をまぬがれず大逆なれども懺悔すれば罪きゆ　錄四二頁

譬へば鍼は鐵なれども、水の上にをけば、沈まざる事なきが如し、又懺悔すれども懺悔の後に重て罪を作れば後の懺悔に此罪消がたし、譬へばぬすみをして獄に入ぬるものゝ、且く經て後に御免を蒙りて獄を出たれども又重て盜をして獄に入ぬれば、出てゆるされがたきが如し　錄四三頁

一、發心篇　4、神秘的發心

妙莊嚴王（つゝき）

古定賢正

吾人は既に妙莊嚴王が發心せんとするに到つた徑路の大躰を話したろうこてこれから此王の過去世の事に就て少しく話をしなければならぬ

昔さる國に四人の僧があつた此四人の僧は宿世如何なる善根ありてか盛んに法華經を信じ純圓一實の妙道を修したのであつた併し餘り其御利益が現實に起り來ないので四人のものつら〳〵思ふ樣は斯樣な雜閙な處で此一實の妙道を修するから其で却て其功德が薫發しないのであるこれは一向山林の閑靜な處で諸〳〵の世間の雜念を離れて此經を讀誦しそして偉大な功德を受けねばならぬと決心し四人の僧は斷然山林の生涯に入たのである峰の松風谷の水音はさながら自然の天鼓て世の聲色を遠く離れた趣はまたと得難い有樣てあるかゝる閑靜な處で心ゆくばかり法華經の修行は出來たが然し日を經るに隨つてれひ〳〵、衣食に乏しくなつた此等の僧とて如何に尊い法華經を修行して居つてもまだ何しろ人間界のものであるから衣食に乏しくてはとても仕方がない命ありてこそ法華經を護持することは出來る若命がなかッたら此法華經は拋なけれ

ばならぬ是何より殘念なことである彼等四人のものは特に詮議をこらした末中の一人がいふにはよし公等三人は專念一意此法華經を修行せよ吾は又此身心を犧牲に供してそして食を市に求めるから公等乞ふ安心せよ吾日々市に出て〳〵食を求め是を公等に供へんとそこで三人は大に喜んで其一人の爲すことに任して居つた此一人の僧は毎日市に出て〳〵千門萬戸貴賤上下を問はず食を請ひ衣の破れたのなどを貰つてそして三人の護法の命を持續させた一日此僧が市中を歩いて居ると其國の王樣が美々敷出立ちて行幸があつた前の供廻り後の供廻り尋相で錦の旗指物金銀の御道具世の榮華や歡樂の總ては悉く此一行に集つて居る其時僧は路傍に此行列のまばゆさを見て私に愛着の念を起し人間と生れるからは此位の歡樂は味はねばならぬ吾も此位は踏て見たいといふ念が起つた此念が萠したのは山林の定心が變じて世間の散心に變じたのであつたが然し此僧が法華經を持ち又法華護持の僧を護つた功德に依り終に此國の王と生れることが出來た

即ち妙莊嚴王といふ王となつた

榮華、愛着、歡樂、美人、黃金、是帝王生活の殆んど總ての現象である甚深なる大法の感化は帝王生活の宮殿には入らない峰の松風に俗耳を洗つてつら〳〵世間を觀ずるといふことは夢にもないのである若し妙莊嚴王があらゆる世の歡樂に醉ふて毫も反省の念が起らなかつたならば未來の果報は誠に悲慘なものである茲に於て先の三人の比丘は最早此王の未來に對して默々として居るわけにはゆかなくなつた即ち此王は歡樂に醉ひつゝある間に三人の僧は妙經受持の功顯れ世にも尊い聖者となつた

三人の寒僧は三人の聖者となり一人の乞食僧は一人の帝王となつた四人はどこまでも四人であるが前の四人と後の四人とは其資格が特に異ッて來たのである三人の聖者は相議していふには如何にもして彼吾等が前身の友たる妙莊嚴王を救はねばならぬ乞ふ一人は美人となつて妙莊嚴王の皇后となり二人は妙莊嚴王の子と生れてそして三人相通じて此王を善道に導き聖道の入れなければならぬと議此に決してその通りとなつたうれて一人は淨德夫人となり二人は淨藏淨眼といふ子となつたのである

讀者よ吾妙莊嚴王はかくの如くにして漸次元の法華の道に入りかゝつたのである

淨德夫人の貞淑なる節を持して玉の如き顏に崇高なる微笑を湛へて後宮夜三更にして王に向つて佛道のありがたきを說いた時は彼王は何と感じたであらふ自分の妻よりかくの如き說法を受けよふとは夢にも思はなかつたに相違ない此時は王はまさに淨德夫人を天女とも見たであらふ淨藏淨眼の二人がいろ〳〵に身を現じて父王の心を散心より定心に立かへらしめんとした苦心を何と見たであらふ王は果然聰明な人物となつ

た智慧は世間のそれに甘んぜずして出世の道に入り又人間散心の果敢なきを漸やく悟るに到つた即ち二子の神變不可思議を見て心頻りに動き雲雷音王佛の御許に後宮の眷屬四萬二千人を引具して參詣して佛陀微妙の相好を拜し親しく法華經の尊いことを知るに到つた

佛は王の爲に特に一場の法をお說になり王は頻りに喜び茲に始めて王自らも又淨德夫人もそうして又二人の王子も出家して了つた

王は特に佛陀を讃嘆して佛身は希有なり端嚴殊特第一微妙の色を成就すといつた彼は如何にも佛陀微妙の御姿に感じたのであらふ

佛陀は此二子の過去世を語り二千六十五百千萬億の佛陀を供養したことのある善根深重な菩薩であつたことを說き

王は從來の邪見憍慢瞋恚諸惡の心を滅し善良なる一求道者となつた

そして此法華經の本品の結論に到つては此等四人の人々が現在の位置を明にしてある即ち王は華德菩薩で淨藏淨眼の二子は藥上菩薩藥王菩薩で淨德夫人は妙音菩薩である

あゝ四人の山林生活の寒僧は終に幾世をかへて後宿善薰發せる法華經の菩薩となつた富の爲に苦心する者は多い世の中に此の如き話は眞に稀である世俗の榮華を拋ちて其身を宗敎的道德的に完全に造りあげるといふことは誠に出來にくいことである世は鐵や血で腥くなり酒の香や白粉の色で華奢になつた時此の如き宗敎的に意思の强い道德的な訓誨のこもつた話をするのは其處に一片の慨世嘲俗の意氣のあるのを認めてゆしい吾人は聖典上の寓話でも神話でも其處に現れた思想が此人間世を益するものなることを認め此物語の概略を述べた次第である

（をはり）

聖語

指る解無くとも南無妙法蓮華經と唱ふるならば惡道を免るべし、譬へば蓮華は日に從つて回る、蓮に心無し芭蕉は雷に依つて增長す、是草に耳無し、我等は蓮華と芭蕉の如く、法華經の題目は日輪と雷との如し、犀の生角を身に帶て水に入れば水五尺身に近ずかず、栴檀の一葉開きぬれば四十由旬の伊蘭變ず、我等が惡業は伊蘭と水との如く、法華經の題目は犀の生角と栴檀の一葉との如し、金剛は堅固にして一切の物に破られず、白羊の角と龜甲とに破らる、尼俱類樹の枝は大鳥にも折れざれども而も蚊のまつ毛に巢をくふ鷦鷯鳥に枝を折らる、我等が惡業は金剛の如く尼俱類樹の如く法華經の題目は白羊の角と鷦鷯鳥との如し、琥珀は塵を取り、磁石は鐵を吸ふ、我等が惡業は塵と鐵との如く法華經の題目は琥珀と磁石との如し、是の如く思ふて常に南無妙法蓮華經と唱ふべし

錄三六頁

二、教相篇　權 8 實對

釋尊の本意

原田容廣

我が日本大帝國の臣民は五千有餘萬の大多數でありまして、此等人民が何等の順序もなく、但散漫として統一のなきものであるが、否秩序整然として　天皇が統御せられて居る如くに、佛敎中の佛が大日彌陀藥師佛と如何に多くとも、經典が何程澤山にあろうとも、幾多の宗旨が各立して居るとも、決して迷ふてはなりませぬ、佛の上にも、菩薩の上にも、經典の上にも、皆悉く統一の筋目が確立して居て決して亂れてないのです、さなくて佛の中心とその經の眼目がなく、只佛が多くの經を說き放して、末代の人々よ、勝手次第に採てゞうなとソコ然るべき樣覺がよいなぞと、無責任なことを申された筈はないと云ふ事を能く承知が願ひたい、殊に時代に依て思想界と風俗が異る如く、み敎も又其の通りて、佛の御入滅後正像二千年間の人類は、小乘或は權大乘敎の諸宗にて事か足りても、今末法と云ふ濁れる世、罪惡多き人を支配するのは、此等淺劣の經ではならぬ、方便の敎は役に立たぬが故に、愈よ以て深き佛の本意たる法華一乘の大法に限るぞとの仰せです、去れど人多く一向に何とも思はん、佛は此等の人を指して曰く當來世の惡人は佛の一乘の法を聞て迷惑して法を破し、終に惡道に落るぞとひたすられかなしみになりました、早き噺か佛の統一權は敎主、即ち法華經の上に顯れ給ふ釋迦牟尼佛であると申ことは何人も決して異論はない、若しありと云はゞ此を顚倒の衆生とも、外道とも名けます、所詮佛敎の統一權を認めざる人は、郡縣制度を置て封建制度を重んずるが如きなのです、何と皆さん、無暗矢鶴に心猿意馬を走らしてはなりますまい、次に經典ですが、是又何の經にか統一權がある筈です、大日經か彌陀經か、般若經か、否然らず、佛の本意の經則ち法華經なのです、彼の服部天遊すら法華經は併包を主として居る、覇氣がある、寛大自ら王者の氣象があると申てゐます、要するに、法華經は一代敎の中心一切經の骨目であつて、小乘權大乘の諸敎を統一した經であると云ふ事は今更申迄もない、何んと其がドーシタかと云はゝか、然らば語を節儉して申さん、爾前の諸經を奉戴して建て居る禪念佛等の各宗にては、佛敎の終極目的たる大安樂即ち成佛が絕對に出來得ないと申大問題であります、ナゼカ他經諸宗は斷じて佛の本意でない、眞實でない方便である、時代が過去て何の役にも立たぬと佛自らの御物語りてすそれをうつかり瓢簞で、眞言や天台の老大宗の人々は、宗旨が古い敎が多いなぞとの安心で、一向平氣とはあまり大古の民すぎる、所詮受け難き人身を受け値い難き佛法にあふて、

此の度得脱が出來ずば何れの時やある、智者學匠富貴權門の人と雖も地獄に落ちて何の詮がありましようか、毎朝夕合掌禮拜するのは決して小笠原式であるまい、墓無き人世を轉じて常樂我淨に遊ぶ金剛不壞の身を得なければなりませぬのが、佛敎の最終目的であるのに、爾前の諸經諸宗にては斯の如き結構な身は斷じて得られない、實に愼み且つ恐るべきである、第一爾前敎は宗敎の平等性を欠いています、そは女人惡人と二乘の成佛を許さぬと說てある、ソコガ佛の本意でない方便にして眞實敎でないと自ら印可決定されたる所以です

御覽なさい、比叡山や高野山等には女人禁制の石札がある、弘法大師の母公が登山の時には火の雨か降りました、日蓮聖人御修行の頃此の山にて彼の嘶を聞し召して曰ふ樣、淺猿哉弘法大師、唐に渡り天竺に越へ難難修行の功積て、御身ひとりは佛果を得たれ母を救ひまねらすと協はず、現在この山に地獄の炎を降せ、牙を咬石を捩て怨を末世に傳へ、恥を後代に晒させ奉りし大罪は無量劫無間の底にその身を焦すとも此の罪猶消へ難かるべし、何と非道でありませぬか、若し女人が不淨なりとせば汚れし袋の黃金は直に捨てるか、池の不淨を忌めば蓮はあるべからず、極めて不合理にして偏狹若し僧に戒を持たしむる爲に一切の女人を禁止するとならば愈よ御婦人方を馬鹿にした譯でしよう、基督敎徒なぞか佛敎は女人を救濟せぬと云ふは爾前とその宗旨に當るてす、全体戒は他人に非ずしてそれ自身に屬したものてす、烏渡申ても箇樣のわけてあります、又爾前の經々には十界の互具と申大法門がない、故に成佛の要點に至りては殆んど皆無と申してよい、妙樂大師は爾前の佛を厭離斷九の佛とて、九界と佛界の關係が絕して相互に能く通じない、エーテルがない、故に九界の衆生が佛に成ると云ふことが甚だ難い譯です、去れど一應與へて云へば、爾前の諸經にも時々處々に覺者がありますが眞の悟りてない、恰も水中の月の如くなので、眞實の悟道は獨り法華の會座、殊に本門顯本の大敎義でなければなりませぬ故に宗祖が爾前迹門にして尙生死離れ難し、本門壽量品に至りて必ず生死を離るべしと仰せられたのです、佛は法華經に一切の衆生をして皆悉く佛道に入らしむると公然開會されたので、二乘も惡人女人も一切の衆生此の法華經に來りて始て成佛が出來、常住不滅の大安樂の身を得たので、その喜びは譬るに物なく、恰も強敵に捕らはれし人の許されて父母妻子に値ふが如く、生盲の始めて目のあきたる有樣て、智積菩薩や舍利弗尊者は實に驚いたと默然として居られた位でした、さもあるべきてしよう

サ皆さん是れてす、佛法所信の方はこの奧の手を知らなければなりませぬ、然れば未だ因緣の薄くして法華經を信じ難き方々は、不成佛の經を捨てその宗に執着せず、一日片時も早く來りまして、現世安隱後生善處の金言に浴せられよ日蓮聖

人は示して曰く

汝早く信仰の寸心を改めて速に實乘の一善に歸せよ、然れば三界は皆佛國なり、佛國それ衰へんや、十方は實土なり實土何ぞ壞れんや、國に衰微なく土に破壞なくんば、身は是れ安全にして心は是れ禪定ならんと

又已てに法華經所信の方々は喜び給へ、その如何に因緣の厚きかを、今み佛に問ひ奉ければ　佛　法師品に曰く

此の經に於て敬ひ視たてまつる事佛の如くにして、種々なる供養をし合掌恭敬せんか、藥王當に知るべし、是の諸の人等は已てに曾て十萬億の佛を供養し、諸佛の所に於て大願を成就し、衆生を愍が故に此の人間に生れたり、藥王若し人有りて何等の衆生か來世に於て作佛を得べしと問はゞ示すべし是の諸人等は來世に於て必ず作佛することを得べしと

右金言の如く愈成佛は疑なきぞ、黑闇々たる社會に自分等は如是一道の大光明に接觸し得たるを思ひなば、お互に起居動作の間にも忘れ難きは本佛の大慈悲、造次の内にも謝し奉るべきはその大恩でありましよう、斯して本門壽量の所顯事の一念三千の南無妙法蓮華經を信し奉る人は、佛の金言の如く是の人佛道に於て決定して疑なしとの思召に叶ひ嬉しくも最と頼母敷感せられて、行住座臥にをこたらず唯南無妙法蓮華經と唱へ奉り現當二世の大安樂を得給んことが最も肝要に存じます

八、行法篇　5　弘通

先づ自己を知らざるべからず

清瀨日憲

この『自己を知れ』と云ふことは誰れにも必要のことてありましてソクラテスも其敎の主なるものに置いてありますし又デルフォイの神殿の入口にも書いてある語だと云ふことは常に人の知るところてありましよう。

これは當にソクラテスの敎義や又神殿の入口計りてはありません、一切すべての敎義、一切すべての入口手始には決して欲くべからざる必須の要件てあらうと思ひます。之を學生の上に例して申したならば學生がこれから學問勉强を致したいと志を立てた時、先つ第一に考へねばならぬことは何でありましようか、勿論學校の選定も必要てあらうし課業の選擇も必要でありましようがそればかりてなく卒業後の方針までも考て置く必要もありましよう、況んや直ぐと必要てある學資金をこしらゐることなぞは極めて必要のことゝ存じます。乍去それよりも猶もつと必要なことが一つあります、それは外のことてはありません所謂『自己を知る』ことて、自身は果して學問勉强に適するものてあるか、どうだかを自觀して自分を知らねばならぬのて、其時充分に考へに考へた上、愈自

身の胸中にきつとやつて見るといふ確かな自覺が出來ましたら、そこでそれ〳〵その途にとりかゝるべきであります、其外商業をするにもせよ職業を營むにもせよ何にをするにもせよ皆この自覺なしには成功するものでありません。

なるほど學問勉強には學資金が必要であり、商業を營むには資本が大切であり、旅行を致すには旅費の工面が必要には違ひないが、尙ほそれよりも必要なることは何れも皆な自已を知ることであります、これは唯學問や商業を營むことのみと限つたものではありません、自己を知るといふことは、さういふことをなさうが、なすまいが、この世にある間は一時片時も忘れてはならぬことであります、世間で、すむとかすまぬとか成功とか失敗とか喧嘩したり腹立てたり、種々樣々のことの起るのは大抵、人々が自己の本位を知つて居るか、忘れて居るかの二に起因して居るのであります、或はまた私共が、何につけ彼につけ、時々心の中に種々樣々な煩悶苦痛を感ずることであります、これも大抵は自己を知ることによつて拂ひのけることが出來るものであります、人間が時々苦んだり悶ねたりするのは十中が八九までは、自已の價値を餘りに認めすぎて、それがために反て非常なる苦痛煩悶を感じて居るのであります、世間であんまり人を馬鹿にした話だと腹を立て、あの人も、あんまりの人であると怨んだり、嫉んだり、謗つたり、泣いたりするのは、多くは人の身上のことばかり見て、自已を忘れて居るがためか、或は又餘りに自已の價値を大きく認めすぎて居るかの何れかより起るものであります、夫れ故に私共の心の上に憤怒、怨恨、嫉妬、誹謗等の心が起り、或は又苦痛煩悶の念、我胸中にわいたならば私共は早速自ら考へるべきであります、各自に我自已の本位を觀るべきであります、我は自己を忘れては居らなかつたか、或は我は餘りに自己の價値を見つもりすぎては居らなかつたかと、人間といふものは甚だ自己を買ひかぶるものであります から日夜に能くこれを反省して世間のことに就ても宗教のことに就ても先づ第一に自己を知るといふことが最も必要なものであると云ふことを知るべきであります、畢竟するに人生の門戸は唯自己を知る人によつて開かれ又この自覺によつて我宗教の關門は開かれ得るのであります、

そこで先づ自已を知ると云ふとに就て考ふるには、この人間と云ふものゝ根本より其價値を知り能く其力を計らねばならぬので、今能くこの人間の實價實力を調べて見るに、いくら英雄豪傑であらうが、いくら才識卓犖であらうが、いくら高位であらうが、いくら富貴であらうが、人間と云ふものゝ力を見るに實に有限であつて其價に就ても亦決して無限大のものではありませぬ、

其智識の有限なること、

其體力の有限なること、

等を始めとして凡そ人間なるものは貴賤上下、老若男女を問はず、皆悉く多くの苦悶を持ち、罪障を作れることは日々止まずでありまして、この皮一枚を取ればどれ程に慕ないものでありましようか、どれ程にさたないものでありましようかどれ程に悲しびべく卑しびべきものでありましようか、これを教主釋尊は法華經の結經に御示しになつて居ります、即ち

身は殺盜婬、心は諸の不善を念ふて十惡業及び五無間を造ること猶猿猴の如く又胸膠の如し、處々に貪着して遍く一切六情根の中に至る、この六根の業、枝條華葉悉く三界二十五有一切の生處に滿てり、

と此の有樣でありますものどうして〳〵人間が氣の利た顏して、すまし込んで居つても中々許るせたものではありませぬ暫く色々の肩書や燦然たる金モールの爲めに人目を眩まして豪傑であるとか、エライ人であるとか思はしめては居るが、其肩書の下に幾多の不善の業を爲しつゝあるか、燦爛たる金モールの其裏に於て伏在せる罪障は夫れ幾許でありましようか、人間が眼根に經て造くるところの罪、耳根に經て造くるところの罪、鼻根に依りて造くるところの罪、舌根に依りて造くるところの罪、凡べて身心より作くるところの衆罪は日夜に夥しいものであります、これが皆他に發現して貪欲となり瞋恚となり愚癡となり嫉妬となり怨恨となり憎惡となり中傷となり排擠となり呑噬となりて種々樣々なる惡德が世に行はるのであります、

加樣に人間と云ふものは罪根深くして煩悶苦惱の裡に生息し人間の大方は罪苦の生涯を送るもので、加樣な分際であります から、イクラ立派な人間であると云つても又イクラゐらい人物であると云つたところで矢張人間は人間であるから皆彼の結經に御示しになつて居る其輪廓内に彷徨して居る罪根の深き連中たることは免れぬ所であります、かゝる人間が人間の仲間で少々智識があつても佛陀無限の慈悲なり智惠なりからこれを御覽になれば人間智識の如きは有限も有限もソレは實にチッポケなるもので殆んど智識なりとは大な聲では云へない位なものであります、其他體力に致せ意力に致せ行力に致せ忍力に致せ凡べて人間の能力が又有限であり纖弱であつて力のなきことに於ては實に驚くべきヒドキものであります猶この上に人間の賴みとして居る壽命と云つたらどうであるかと云へば風前の燈に比せられたり草上の露にも譬へられたりして居る哀れ墓なきものであります、さればこの人間の哀れ墓なき有樣を吾聖祖はかく御示しになつて居ります、則ち

悲哉痛哉我等無始より已來無明の酒に醉て六道四生に輪廻して、或時は焦熱大焦熱の炎にむせび、或時は紅蓮大紅蓮の氷にとぢられ、或時は餓鬼飢渴の悲に値ふて五百生の間飲食の名をも聞かず或時は畜生殘害の苦をうけて少きは大なるにのまれ、短きは長にまかる、是を殘害の苦と云ふ

或時は修羅鬪諍の苦をうけ、或時は人間に生れて八苦をうく生老病死、愛別離苦、怨憎會苦、求不得苦、五陰盛苦等也、或時は天上に生れて五衰をうく、此の如く三界の間を車輪のごとく回り父子の中にも、親の親たる子の子たる事をさとらず、夫婦の會遇るも會遇たる事をしらず、迷へることは羊目に等く暗きことは狼眼に同じ、我れを生みたる母の由來をもしらず、生を受けたる我身も死の終をしらず嗚呼受け難き人界の生をうけ、値ひ難き如來の聖敎に値奉れり、一眼の龜の浮木の穴にあへるがごとし、今度若し生死のきづなをきらす、三界の籠樊を出ざらんことはかなしかるべし、

と仰せられてあります、殊に吾等の無常なることを御警誡下されたる聖祖の御言葉を拜するに、則ち

抑も上は悲想の雲の上下は那落の底までも生をうけて死をまぬがるゝ者やはある、然れば古人の詞にも朝に紅顏有つて世路に誇るも夕には白骨と爲つて郊原に朽ぬと云へり、雲上に交つて雲のピンヅラあざやかに雪のたもとをひるがへすとも其樂みをおもへば夢の中の夢也山のふもと蓬がもとはつゐの栖也、玉の臺錦の帳も後世の道にはなにかせん小野小町衣通姫が花の姿も無常の風にちり、樊噲張良が武勇に達せしも獄卒の杖をかなしむ、されば心ありし古人の云く、あはれなり鳥べの山の夕煙れくる人とてとまるべきかは、末の露もとの雫や世の中のをくれ先だつためしなるらん、先亡後滅の理り始めて驚くべきにあらず、願ふても願ふべきは佛道、求めても求むべきは經敎也、

と御懇篤に我等の爲めに御慈訓下された次第であります、この聖祖の上に示したる二個の御慈訓の意義は能く吾人人生の罪惡から苦悶から殘りなく人生の秘底を盡くして御指導下さつてあるのであります、ソーして吾人人生の無常にして一刻と雖も油斷のならぬこと、無常の風の前には貴賤もなく老若もなき次第を御注意下さつた譯で　世の中の多くの人が日夜役々として貪々邪々の煩惱に馳せ廻つて闇から闇へ、醉生夢死を幾度となく繰り返しつゝあるを御悲嘆遊ばさるゝのが佛祖の吾人衆生に對し玉へる救護の御涙であります、されば聖祖は吾人衆生が過去遠々劫より同一の事ばかりを繰り返し迷ひから迷ひに、苦悶から苦悶と生死の苦にのみ出沒して未だ曾て苦界を脫出し能はざることを嘆き玉ひて『多生曠劫にしたしみし妻子には心とはなれしか佛道のためにはなれしかいつも同しわかれなるべし』と何んたる至誠摯實なる御言葉でありましよう、唯感泣を以て肺肝に銘ずるの外は御座いませぬ、

斯くの如く吾人人間たるものは其根本に於て既に佛陀の無限大に比すれば至極微小なもので、其智惠に於ても微小であり其體力に於ても微力であり、其行力忍力等の各能力に於て

も悉く微薄なもので、搗て加へて壽命はと云へば風前の燈と來て居るのだからたまらない、迚も萬能だの靈長だのと云つてすまし込んで居る譯に行くものではありませぬ、それですから吾人が『自己を知れ』と云へる意義を常に念頭に措かなければならぬと云ふはこゝのところでありまして、我々が一たび自己と云へる立場を知りまして能く自己の地位立脚を心得てさへ居れば世に處して行つても滅多に誤るものではありませぬ、自己の忘れたり又は自己を買ひかぶつたりするところから、種々の苦悶をしたり色々の顚覆にも會ふのであります、

佛陀はつまりこの自己を妄るゝものに自己を忘るなよ自己の本能、自己の本性を知れよと御慈敎遊ばされましたので一代の經敎は皆つまり夫れであるのです、殊に法華經受記品には『無價の寶珠を以て汝が衣の裏に繫く、今故ほ現在せり、而るに汝知らずして勤苦し憂惱して以て自活を求む、甚だこれ癡なり』と說き又『內衣の裏に無價の寶珠あることを覺らず』と說き給ひ、壽量品には『或は本心を失ふ』と說れ又は『狂子を治せんが爲め』とも說き給ひて、凡夫迷妄の衆生は兎角皆自己の本能本性を知らず覺らずして苦悶の苍に辛吟し、さまよひ居ることの其愚なるを御慈訓下さいまして、吾々苦の衆生を苦海より救濟し玉ふところの福音は到るところに於て拜し奉ることを得るのであります、

若しこの自己を能く知るに至りましたならば、自己の價値を認め過ぎて遂には怨恨や煩悶に陷る樣なこともなく、又これと同時に自己を餘りに見くびりて自暴自棄に陷る樣なこともなくなるのであります、此等のことは能く注意を致さねば自己を餘りに買かぶりて自己を忘れたものは其結果は非常な失敗になるのであるがさりとて又餘りに自己を捨てた、やりかたも善くないことで、これは共に自己を忘れ、自己を知らざるものと謂はねばならぬ、法華經譬喩品の三車大車の御譬や又信解品の長者窮子の御譬なども皆これ自己の價値を知らざる自己の地位を忘れたる愚なる自暴自棄の者を御慈誨なされたのであります、

然らばどう云ふ曉梅にすれば自己を知ると云ふことになるのか、是れが事實に於て必要なる問題であるのです、併し自己を知るのは矢張自己で、自己が一番能く自己を知つて居るのいと云ふことになるとうれは、只ごとではないのである、蓋し夫れは內界から出て然らしむるものと、外界から來つて惱ますものとの二種の茲に汁意すべきものがあります、其內から出てゝ自己を忘れさせると云ふのはどう云ふものを指して云ふのかと申せば、これは直接自己の心內より起るところの業障で、早く申せば自分の煩惱であります、この障りを多く

持つて居るものと少く有つて居るものとの違ひがあるが、其業障の少いものは自己を忘るゝことが少くして業障の多いものは隨つて自己を忘ることが多い譯になるのであります、これを今日では先天的だの後天的だの又は人格修養だの精神教育だのと種々の名稱の下に種々の研究をしまして完全の人物をこしらへんとして居りますので、何にしろ世間でも學問があり文字や藝能を多く知つて居るものは少くないが、眞に人物と云はるゝ人格の高き、心事の高潔にして敦厚なる所謂ゼントルマンの名に恥ぢざる工合の善き人物の少いことを漸く自覺しかゝつた樣に認めますが、これを宗教では自分の内より障るところの煩惱として世間の精神教育以上に、深く強く反省を促し克己の道を教ふるのであります、

夫れから外界より來るものとは何にかと云へば、凡べて自分より外なる客觀から來つて障るところの魔障と云ふのであります、これが中々澤山あるもので、色より來つて障るものもあれば聲より來つて魔するものもあり、又香より來つて障るもの、味より來り觸より來つて惱ますものもあり、中々と吾人を襲擊するところの凡べての武器は能くそろつて在るのです、此等の襲擊隊の爲すところは巧みなもので、奇襲もあれば逆襲もあり、夫れで以て多くのものは晴まされて仕舞ふ、遂には外界の魔障に白旗をかゝげて仕舞ふのであります、なんと怖るべきことではありませんか、

この内外兩界から吾人を惱まし煩はすところから吾人は哀れにも色々に惑ひ狂ふて遂には自己を忘れ本性を覺らざる愚かなものとなるのであります、夫れで吾人は内界に慎み、外界に警め、内煩外惱に備ふるところがなくてはなりませぬ、併し其内外の魔障に警備を爲すにも能く其魔障の依つて來る原因を知り根底に衝いてやらなければなりませぬ、それは何にかと云はゞ吾人を煩はし惱ますところの惑業苦の親玉である元品の無明と云ふ元兇を捕へて誅戮を加へてやるのであります、うの元兇を退治するの方法は如何にせばよいかと云へば、諸法諸藥の王たる元品の無明を切る大利劍なる大良醫の投藥なる是好良藥の妙法を信念口唱し奉つて毫も彼れ元品の元兇たる大魔物の乘ずべき機會のない樣に致し、猶ほ進んで其元兇の爲すところをして佛界的に善化善用せしむる迄にせねばならぬのであります、

かく無明をして佛界的に善用せしめ、惑業をして本覺的に善動せしむるに到れば、生きて世に處する場合に當りても自己の本位、自己の價値を忘るゝが如きことなく、失墜過誤を繰り返すこともなく、煩悶痛苦に陷ることもなくして　人間としての活動、人間としての快樂は自ら相應に把握することを得るのであります、又死して未來に處する場合にも教主釋尊の御命慮に叶ひ、四德波羅密圓滿の境遇を得て無上の光榮を受くることは明瞭であります、夫れは返々も『自己を知れ』と

聖語

云へる格言聖誨の旨に順ひまして平素より深くこの點に注意警誡し、本佛釋尊の救濟慈悲の御手にすがりて本門三大秘法の南無妙法蓮華經を信念口唱して身讀するが一番に善き自己を知る法であります、夫れが一番に善き自己を忘れざる道であります、

一代聖教の中に法華經は明鏡の中の神鏡也、銅鏡には人の形をば浮ぶれども心をばうかべず、法華經は人の形を浮ぶるのみならず、心をも浮べ、心を浮ぶるのみならず、又先業をも未來をも鑒みることくもりなし、法華經の第七の卷に云く、如來の滅後に於て佛の所說の經の因緣及び次第を知りて義に隨つて實の如く說かん、日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く斯の人世間に行じて能く衆生の闇を滅す等云云文の意は此の法華經を一字一句も說く人は必ず一代聖教の淺深と次第とを能く辨へたらん人の說くべき事に候（錄五六九頁）

驚目一貫文送り給ひ候ひ畢ぬ、御志の候へば申し候ぞ、欲深き御房と思召す事なかれ、佛にやすく〳〵と成る事の候、教へまいらせ候はん、人に物を教へると申し候は、車の重けれども油をぬればまはり、船を水に浮べて行き易き樣に教へ候なり佛に成り易き事は別の樣候はず、旱魃に渴ける者に水を與へ、寒き氷にこゞへたる者に火を與へたるが如し、又二つなき物を人に與へ、命の絕るに人のせんにあふが如し（錄五七一頁）

九、得益篇　1總要

本佛の大慈悲に依りて得たる大功德

井村恂也

今回は得益と云ふことに就て御噺を致すのでありますが、此得益と云ふことは委しく云へば「御利益を得る」と云ふことで我々共が信心修行を致すのは何の爲であるかと申せば、御利益が得たいからで、丁度商人が一生懸命に拵ぐのは金儲の爲であると同樣、現在より、より以上の得分を自分に獲たいからであります、その利益を得ると云ふことに就て少々御噺を致しませう、先づ

教法と得益との關係

から述べませう抑も佛樣か此世に御出興に相成りまして種々の教法を說き、種々の修行の方法を御示に相成りましたのは何の爲であるかと申せば、佛自ら此事を

我は如來、兩足の尊たり、世間に出るは猶ほ大雲の如し、一切枯槁の衆生を充潤して、皆苦を離れ、安穩の樂、世間の樂、及涅槃の樂を得せしむ、（藥草喩品）

我も亦これ世の父、諸の苦患を救ふものなり、（壽量品）

と仰せられましたが、此の世の中の人々は此世に生れて已來何等の善根功德を爲すこともなく唯徒らに五欲の奴隸となり

煩惱の爲めに使はれて、一生涯は夢と過ぎ命終らば元の杢阿彌、六道の巷に流轉して、いつまでも迷の境界を脱るゝことが出來ません、此有樣を佛樣が悟の眼から御覽遊されて『ア、憨れなる子等よ、』(此子可憨)と思召して、大慈大悲の御心片時も捨置給ふこと能はず、吾人をして此苦しき境界を脱れ樂しき果報に至らしめたいとの思召より、此世に御出世遊ばされましたのてあります、前に示しました御經文に「我は如來兩足の尊なり」とは御自身の御悟り遊ばされましたことを申されましたので、如來とは「まことの道にかなつたもの」と云ふ事、兩足尊とは兩足は人の事で「人の中の一番尊さもの」と云ふこと、我は悟を開いて居るものてあるぞ、今汝等の爲めに出世して汝等をして世間の樂(現世の利益)及涅槃の樂(未來成佛の利益)を得せしむるのてあるぞと御說きに相成りましたので誠に佛樣の大慈大悲の御心は厚く感謝せねばなりません、佛樣は斯樣な思召から御出世になりまして衆生を化導せんが爲に御說法がありました、此御說法は一切衆生に世間の樂及涅槃の樂を得せしむる方法を種々と御說き遊ばされましたので、此御說法が今日御經文として傳つて居りますのてあります、之を敎法と申します、此敎法の御經文に說いてあるのが吾人共の現當二世の御利益を得る方法てあります、故一切經は皆我々が利益を得る方法を敎へられたものと申さねはなりません、が、斯樣に申すと一切經凡てか我々の利益を得る方法を說たものてあるならば、どれもこれも皆一つてあらうから、どれても好きなもの次第てよろしからうと言はれましようが、ろれは一切經と云ふものには權と實の差別があるとを知らぬからてあります、其譯は佛樣が在世五十餘年の御說法の對告衆は迦葉尊者とか舍利弗尊者とか申す人々て(此等の人々の事を佛法では二乘と申します)此等の人々は元外道の法に依つて修行して利益を得んとして居つた人々てあります、此等の人々を敎化するを正意と致して御座いますから、此等の人々か外道の法から佛法の方に移り變つて參りますのに、一度に佛樣の御本意を示せば宜かろうけれどもそれては夫等の人々の腑に落ない、それ故にいろ〳〵と手を替へ品を替へ彼の人々に呑込める樣に御說法になりました、丁度劍術師が自分の弟子を仕込む樣なもので、最初は太刀の持樣、身の構へ樣抔から敎へ、段々修練した上て極意を授けて免許皆傳と云ふことになる如何に師範が奮發して初心の者に極意を授けても相手が呑み込めぬから何にもならぬ、佛樣もそれと同じて、最初から佛の本意は示したいけれども、如聾如啞と云ふて啞か聾を相手にする樣て一向御噺に成らん、これてはいかぬから、四十餘年の間は修練の爲め種々の御說敎がありましたのてあります、其練習が出來上がつて後、始めて佛御自分の御本意を御說きに相成る樣に成りました、是れを法華經と申すのてあります、それ故法華經の御利益が眞

の利益てありまして、外のは當分假の御利益て之を方便の利益と申します、舍利弗尊者が法華經の方便品て開三顯一の法問を聞いて眞實の御利益を得て佛に申上ました御言葉には

今(法華經の方便品の時)佛に從ひ奉て未た聞かざる未曾有の法を聞いて諸〳〵の疑悔を斷じ身意泰然として快く安穩なることを得たり、今日乃ち知ぬ眞に是れ佛子なり、(方便品)

とあります、今までは眞實の御利益を得て居つたのてないと云ふことてあります、斯樣な譯故、其御說敎か方便の敎てあれば其御利益も方便てあるし、其敎か眞實佛の本懷なれば其御利益も眞實間違のない處の御利益を得られます、敎法と得益とは正比例して居ります、それてありますから眞實の御利益が得たいならば眞實の敎法に依らねばなりません、方便の敎て得た御利益は假令佛樣に成つたと申しても、ろれは權の佛、夢の中の佛てあります、故に常住不變の眞實の利益を得るにはそんな方便の權敎は捨てゝ佛の御本懷を御說に成りました法華經に限る次第てあります、敎法と得益との關係は略お分りの事と存じますか、これから

行法と得益との關係

を述べましやう、行法とは修行の方法て、之は大体に二種に分けます、一を法行と云ひ一を信行と言ひます、法行と云ひますのは智慧を研き戒律を持ち坐禪を爲して心を靜め、佛樣の境界に近寄らんと一生懸命に修行を致すのてあります、つまり自分の智慧才覺て經登つて行ふと云ふ連中てあります、信行と云ふのは自分の智慧才覺には依らないて佛の御言葉を信じ佛樣のお慈悲に縋りてどうぞ助け給へと佛樣へ凡てを任せ申して仕舞ふのてある、それて御利益を得るのはどうかと申すと、法行の方は自分てボッ〳〵と經登りて少〻ヅゝ、進んて行くのてあるから一分の煩惱を斷じて一分の利益を得ると云ふ樣な事てボッ〳〵御利益がある譯、信行と云ふ方は、佛樣と言ふ既に悟を開ひて澤山の功德を積てござる其れ慈悲におすがり申すのてあるから、自分の智慧才覺は無いけれども佛のお慈悲に依り一返に澤山の御利益が貰へます、此を譬へて申せば、法行の方は一人て獨立自營てコッ〳〵と拵いて溜めて行く人、信行の方は親父が拵て溜めた資產を讓受ける人何方か仕合宜しかと云へば溜まつてある資產を貰ふのか手取早い譯てあると同樣、佛法の修行も自分の智慧才覺てコッコツやるよりも佛の慈悲に縋り大功德を讓り受けた方が早道てあります、然らば早速貰ふ事に致しませうが、幾ら貰ふか早道ぢやと言ふたとて、無茶苦茶に何處からても貰つて來ると云ふ譯には參りません、資產のない人からは貰ふ事は出來ません、又少々位あつたにした處が同じ貰ふなら可成澤山の資產のある人から貰らわねばならぬ、何處にそんな澤山な資產を唯呉れる善根者があるてあらうか、是非搜し當てゝ早速讓受の相談に取り掛らぬば相成らぬ次第てあります、其御利益

の讓り手を搜し出すに就ては

本尊と得益との關係

を知らぬばならぬ、本尊と申すは信心の信境として勸請し禮拜するもので、此の信境即ち御本尊樣より御利益を貰ひ受くるのであります、それ故法行の人は別段に本尊は無くても濟みますが、信行の人は是非とも御本尊はなくてならぬのであります、御本尊が無ければ御利益の貰ひ處が無いのである、御利益が貰へねば幾ら信心をしたと云ふても徒行に成るのであるから、信心をして御利益を貰ふには御本尊樣を餘程吟味せねばならぬ、つまらぬものを本尊とせぬ樣注意をせぬと折角骨を折つて信心をしても骨折損の痩勞儲となるのであります、一寸譬て申せば吾々人間仲間の狀態で御覽なさい、多くの人々がそれ〴〵依賴にする人を持つて、其人の手引其人の世話で金儲もしたり出世もする、同じ依賴にする人であるが其の人の地位次第其人の力次第に依つて階級がある、大臣を依賴にすれば少くとも縣知事位には採用して呉れるが、郡長を依賴にすれば郡役所の御雇位が關の山だ、何れにしても自分以上には周旋をして呉れるものではない、之と同じく宗教の方でも御利益を貰ふにも本尊樣として勸請するお方の自分の力以上には利益は與へられるものではないのであります、菩薩樣には佛に成る御利益を下さる力はありません、諸天善神は菩薩にもする力はないのである、依つて本尊として眞實の御利益を頂くには諸佛諸菩薩諸天善神の中で一番尊き、一番力用の大い、一番勝れたる證を得、一番お慈悲のあるお方を本尊とせねばならぬのであります、そのれ方は外でもない、久遠實成の釋迦牟尼佛であります、此釋迦樣は本佛と申して諸佛諸菩薩の大本、活動の根源でありますから、釋尊は天の一月諸佛菩薩は萬水に浮ぶる影であると天台大師は御譬に相成りました、諸佛諸菩薩は皆釋迦佛の影法師である、そんな影法師に信心を致しても何の御利益も貰ふ譯にはいかん、眞實の御利益が頂きたければ、是非とも本佛の釋迦樣にお賴み申さねばなりません、是に於て注意をせねばならぬことがあります、それは外でもありません、前に申した如く信行門の修行で、唯お縋り申して大功德を讓り受けたいと思ふて居つても、賴まれた方で「やらん」と云はるゝればそれまでゞ何んにもならんから、こゝで

本佛釋尊の大慈悲

と云ふとこを會得せねばならぬのであります、法華經の壽量品と申しまするはお釋迦樣が五百塵點劫より已來一切衆生を救ひたいと思召して御苦勞遊ばして御座ることをお說きに成りましたお經文で、拜讀しまするとお何に釋迦樣が吾人の爲めに御心勞遊ばされるかゞ分明に成つて居ります、三世に亘り十方に遍して衆生化導の爲めに種々の形を現はし種々に法を說き、未だ曾て暫くも廢せず、毎に自ら是の念を作す、何

を以てか衆生をして無上道に入り、速に佛身を成就することを得せしめんと等と御說遊ばして、何うがなして助けやりたい、救つてやりたいとの大慈悲の御思召で御居て下されますそこへ吾人の方から助けて頂きたい、救ふて頂きたいとれ賴み申すから、助けてやらうと云ふ考と、助かりたいと云ふ考とが双方より出合ふて、茲に始めて眞實なる御利益を頂くことが出來るのであります、之を感應道交と申します斯樣にして得たる御利益でなければ決して眞實の御利益とは申されません、本佛釋尊の大慈悲のお噺は本尊篇の下で詳しいお噺もあることゝ存じますから略して置ますが、結局、吾人共が申す得益と云ふは本佛釋尊の大慈悲の御手に依り授け與へられたる大功德を以つて眞實の得益と申すことゝ御承知を賴ひます

聖訓

此理を辨へざる一切の人師末學等、設ひ一切經を讀誦し十二部經を胸に浮べたりとも生死は離れ難し、又一分のしるしはある樣なりとも天地の知る程の祈とは成るべからず、魔王魔民等守護を加へて、彼に驗の有る樣なりとも、終には其身も檀那も安穩なるべからず、譬へば舊醫の藥に毒を交へてさしをけるを、舊醫の弟子等、或は盜み取り、或は自然に取つて病人の種々の病を治せんとするが如し、病の直らざるのみにあらず、其身の損せざるべしや

（錄六〇三頁）

十一、警策篇　②對外

聖祖の對外警策、吾人教徒の對外警策

鈴木暲學

宗教は活動を以て其本分とするもので、若し活動のできない宗教ならば、それこそ無用の長物である、果して其活動を實現して本分を全ふしてゆかうとするには、それ相當の方法を取らねばならぬ、處て其方法を誤まらぬやうにするに就て、最も警策といふことが必用になつてくる、今之を國家の上に例して云へば、其國をして益隆昌の域に進ましめ國威の光顯を圖るには、宜しく先づ其國の內治外交を怠つてはならぬ、而して其內治の治蹟を擧げ外交を誤まらざるやうにするには、其れ相當の警策を施すのが肝要である、若し國家にして此警策を施すことを懈るときは、其國の隆昌發展を見ることができない、今日の支那帝國を見よ、其領土の廣大なる其人口の多數なる其財源の豐饒なる、優に他の列國を凌駕することができるてはないか、而るに其內治に於ける外交に於ける、共に列國の後に落ち、漸く國家の命脈を保維するに過ぎない現狀であるのは、是れ畢竟其國の內治外交に對する警策を誤まりしに因由せるものである、然り而して國家としては內治外交の兩面に對して警策の必用あるが如く、宗教家の警

策としても、對内對外の二方面がある、處て先づ聖祖日蓮上人の教義信條を信ずる吾人教徒は、如何なる對外の警策を施爲すべきか、是れぞ宗門として大に考慮を費すべき必須の問題てあります、けれども吾人日蓮上人の門下としては、總て範を日蓮上人に執るべきは言ふまてもなきことてあるから、吾人は聖祖の對外警策を踏襲するのを以て唯一の業としなければならぬ、然らば聖祖が外に對して如何なる警策を施し玉ひしぞ今二三の箇條を擧げて聊か卑懷を述べることにしやう

聖祖が對外警策に就ての宣言

聖祖が對外警策についての宣言とは、果して如何なるものてあるか、是れ吾人教徒の第一に知らねばならぬ必須の要件てある故に聊か長文に渉るやうなれども、左に掲げて、之を示すことに致さう

かゝる時刻に日蓮佛敕を蒙ひりて、此の土に生れけるこそ時の不祥なれども、法王の宣旨背き難ければ經文に任せて權實二教の軍を起し、忍辱の鎧を著て妙教の劍を提げ、一部八卷の肝心妙法五字の旗を指上げ未顯眞實の弓をはり正直捨權の箭をはげて、大白牛車に打乘て權門をかつぱと破り、かしこへれしかけこゝへれしよせ、念佛眞言禪律等の八宗十宗の敵人を責るに、或はにげ或はひきしりぞき或は生取れし者は我が弟子となる、或は責め返し責め落しすれども敵は多勢なり、法王の一人は無勢なり、今に至つて軍やむ事なし、法華折伏破權門理の金言なれば、終に權教權門の輩を一人もなく責落して法王の家人となし、天下萬民諸乘一佛乘と成つて妙法獨り繁昌せん時、萬民一同に南無妙法蓮華經と唱へ奉らは、吹く風枝をならさず、雨壤を碎かず、代は義農の世となりて今生には不祥の災難を拂ひ長生の術を得、人法共に不老不死の理顯はれん時を御覽せよ、現世安穩の證文疑ひあるべからず（如說修行抄）

此文は聖祖が對外警策の理想に就て其意義を盡して論じ給ふものてあるから、此文に憑て聖祖が對外警策の理想を窺ひ知ることができる、實に此文は末法萬年の末までも、聖祖門下の對外警策として常に座右に置き、此宣言をして現實せしむるの大信力を喚起せねばならぬ

對外警策の内容

日蓮上人出興の當時、佛教界の現狀を觀るに強義折伏　佛教の紛亂殆ど其極度に達せし時代で、所謂小乘教に執して大乘教を誹り、權大乘教を以て實大乘教を破り、彌陀大日等を崇拜して、釋尊を捨つるが如き邪法邪師の徒を以て天下に充たされて居つた、丁度下臘が上臘を凌駕し、又一國の主權者に反抗し叛逆を謀るやうな譯て、殆ど言語道斷の狀態てある、今一二の祖判を揭げて其當時佛教界の狀態が如何に紛亂せるかを示さん、

末法に於ては大小の益共に之れ無し、小乘には教のみ有て

行證無し、大乘には教行のみ有て冥顯の證之れ無し、其上正像の時所立の權小の二宗、漸々末法に入て執心强盛にして、小を以て大を打ち權を以て實を破り、國土に大體謗法の者充滿するなり、佛教に依て惡道に墮するもの、大地の微塵よりも多く、正法を行じて佛道を得る者は爪上の土よりも少し（顯佛未來記）

今災法に入て二百五十餘年、五濁强盛にして三災頻りに起り、衆見の二濁國中に充滿し、逆謗の二輩四海に散在し專ら一闡提の輩を仰て棟梁と恃怙み、謗法の者を尊重して國師と爲す、孔丘の孝經之を提へて父母の頭を打つが如し（神馬骨谷抄）

法華最第一の經文を見ながら、大日經は法華經に勝れたり禪宗は最上の法なり、律宗こそ貴けれ、念佛こそ我等が分に叶たれと申すは、酒に醉る人にあらずや、星を見て月に勝れたり、石を金にまされり、東を見て西と云ひ、天を地と申す物ぐるひを本として、月と金は星と石とに勝れたり東は東、天は天なんゝ有しまゝに申す者をは、あだませ給へは勢の多きに付くべき歟　只物狂の多く集れる也、されば是等を本とせし云ふにかひなき男女の皆地獄に墮んこそ哀れに候へ（十四妙法尼抄）

御文中一闡提謗法の輩を仰て棟梁國師と尊重すること、猶ほ孝經を以て父母の頭を毆打するが如し、大小權實の勝劣を知らずして、小を以て大を打ち權を以て實を破り、其邪執の强盛なること、猶ほ星を見て月に勝れたり、石を見て金にまされり、東を見て西と云ひ、天を地と思ふ、所謂玉石混合天地顚倒のものと論斷し玉へり、是れ實に佛教の狀態を道破し玉へるものて、是等の祖判を拜覽すると、聖祖當時の佛教界の狀況を推知することが容易くてきるてあらう、而して此獨强紛亂の外界に對して、聖祖は如何なる警策を施爲せられしぞ、聖祖は是れに對し念佛無間禪天魔眞言亡國律國賊の格言を宣言し、以て强義折伏の大鐵鎚を下し彼等の迷妄を覺醒せしめやうとせられたのてある、然るに此格言を以て偏狹てあるの罵詈てあるなきと思へるが如きものは、所謂酒に醉へる物狂の奴輩にして眞に哀むべきものてある、

統一の大志願　由來聖祖が宗旨御建立の大主意といふものは、區々たる教團成立を期するがため、若しくは瑣々たる派別心より出でしものてないことを知らねばならぬ、單に聖祖を一宗の祖師と見るは、未だ聖祖を意識することのてきないものてある、聖祖は佛教統一の大志願を果さんが爲めに宗旨を御建立なされたので、則ち三大秘法は佛教統一のために顯示されたるものであるから、此三大秘法を以て宗旨の神髓とせられ、是に依つて佛教統一を期せられたので即ち第二の釋尊を以て自任せられた

而るに此法門出現せば、正法像法に論師人師の申せし法門

は、皆日出て、後の星の光、巧匠の後に拙を知るなるべし此時には正像の寺塔の佛像僧等の靈驗は、皆きへうせて但此大法耳一閻浮提に流布すべしとみへて候、各々はかゝる法門にちぎり有る人なればたのもしとをぼすべし（内十九三澤抄）

御文中此法門と仰せられたのは三大秘法の宗旨を謂つたので三大秘法の宗旨が出現せば、自餘の宗旨は丁度日輪の東天に昇れば無數の星辰は爲に光を失ふが如く、又巧妙の堪能なる工匠が現れば拙劣のものは觀るに堪へざると同じことて、三大秘法の法門は日輪の如く巧匠の如く、自餘の宗旨は諸星の如く拙匠の如く、最後唯此三大秘法のみ燦爛たる光明を放つのである、若し三大秘法が顯れなければ、法華經は有れども無きか如く、紙屑も同然となる、法華經が紙屑とならば釋尊は何の爲めに世に出現せられしか、殆ど無意義になつて了ふ故に日蓮上人に依て、佛語が潑々として活けるのである、則ち佛敎を活すべき大任を擔ふて厶るから、是れ第二の釋尊を以て自任せられたと謂つて好らう、依て顯佛未來記に左の如く仰せられてある

然る間若し日蓮なくんば佛語虛妄とならん、難じて云く汝は大慢の法師にして大天に過ぎ四禪比丘に超へたり如何、答て云く汝日蓮を蔑如するの重罪、又提婆達多に過ぎ無垢論師に超へたり、我言は大慢に似たれども佛記を扶け如來の實語を顯さんが爲なり、（内廿七佛未來記）

此等の御文を能く咀嚼ば、前述の意義が益明了ならん、之を要するに聖祖は當時佛敎が支離滅裂甲論乙駁却て人をして惡道に墮落せしむるの具となり居るを見て、之が警醒を書らんが爲めに、則ち三大秘法の宗旨を建立し以て統一の大志願を果さんことを御自分の任務とせられたのである、

現世安穩の實現　聖祖が折伏逆化の大鐵鎚を下し給ひしは畢竟佛敎の大義名分を明にされたので、其期する所は彼の邪執迷妄の徒をして、其邪を捨て正に歸せしめ、以て今生に不祥の災難を拂ひ、長生の術を得、人法共に不老不死の理を實現せしめんとの大主意に過ぎないのである、故に聖祖は强義折伏の裏面には、常に權敎權門の徒をして着々捨邪歸正に向はしめ、其等に諭すに現世安穩後生善處の道を詢へ給へり、彼の富木四條等の諸氏は、何れも最初は皆權敎權門の徒である、然るに聖祖の化に浴して捨邪歸正の實を現はし、後立派に本化の敎徒となり大慰安を獲得せられた如き是れ其一例である、之を要するに聖祖が對外警策として總ての御行動は、野心的破壞的より出でたるにあらずして、建設的の心地より出でたるもので、所謂現世安穩後生善處を實現せしめんとの熱き情より溢れたるものたることを認識せねばならぬ、則ち前に掲げたる如說修行抄の末文を拜讀すれば其意義が明白である、

以上論せし如く聖祖は先づ折伏逆化を行じて佛敎の大義名分を明かにし、彼等の邪執を摧破し、次に三大秘法の宗旨を建立し以て佛敎の統一を圖り、而して後此國土と一切衆生とを救濟せんことを畫策されたのが、則ち聖祖の對外警策の內容である、

吾人敎徒は此對外警策を踏襲し勇往邁進すべきは、聖祖の切々訓誡し給ふ所である、

日蓮さきがけしたり、若黨共二陣三陣につゞいて、迦葉阿難にも勝れ、天台傳敎に越よかし、（種々振舞抄）

是れ吾人に對する適切の訓誡にあらずや、

然るに聖祖滅後に及んで此等の訓誡を忘却し、徒らに枝葉に流れ、無益の業に歲月を費し、終に聖祖立宗の大主意を沒却するに至りました、今試に此等の原因を探ぐるに第一系統寺格爭ひに耽りて其極御讓狀を僞造するに至りしこと、是は聖祖滅後程なく、其門下の堂々たる僧が、法系を爭ひ、寺格の優劣を爭ひ、以て得々之を名譽とするが如きものが輩出したのは事實である、身延は宗祖魂魄の地であるから、此に住職するものは貴ひとか、池上は宗祖の入滅地だから貴ひとか謂て、互に己れの寺格を高めんことに熱中し、其爭の極終には御讓狀を僞造し、聖祖より獨り秘密の法を相傳せりなぎゝ言ひ觸して威張るやうになりました、御讓狀なぎを僞造して迄も寺格系統などを爭ふて威張んとするが如き識見卑陋に陷つた實に哀ひべきの徒である、第二天台に流れたること、彼の僞書を造るの徒、終には聖祖門下の本分を忘れて、天台に流れ自ら聖祖の敎風を悔蔑し自然天台の袋かつぎを以て甘んずるに至りました、第三本迹爭論を是れ事とせること、宗門內部に在ては只管本迹爭論にのみ流れて、互に甲論乙駁殆ど一致勝劣論のために日も亦足らざるの有樣でありました、斯の如く讓狀を僞造するが如き偏狹固陋に陷り佛敎統一の大志願を忘れ、天台に流れて宗祖出興の規模を滅却し、强義折伏の勇氣を失ひ、本迹爭論に日を暮して、宗旨の三大秘法を顯揚することを忘るに至りました、それから延て德川時代に及んで、宗門掟なるものが制定せられ、改宗改派ができなくなつた、法の爲めに死を輕ずるものは、屹度吟味を遂ぐべきことゝ定められ僧侶に咯はすに寺領朱印を以てせられた、是れからといふものは宗門は只形骸のみを存ずることになつて了つた、尤も此間に日奧上人日經上人等其他四五の英僧あつて、聖祖の敎訓を奉じて當時大に强義折伏を行じ對外警策に努められました、けれども宗門の大部分は此等の英僧に對して却て嫌忌迫害を加へた位だから、宗門の大勢は推して知るべきである、それから後に彼の說法者と稱するものありて、祖師一代記の說法をして諸方を巡回し、漸く宗門の形骸を傳へて居つたやうな始末であつた、此間の歷史は詳くいふと、なか〳〵長いが、先づ大體云へは此んな工合で、どうも聖祖

の對外警策が何れの時代にても遂行されて居たといふことが言ひ難い、思へは慨かはしき次第であります、されど過ぎ去りしことは如何に嘆くも甲斐なきことであるから、今日以後聖祖門下のものは一大奮發をなし、今日までの仕損を償ひ願くは世界各國の津々浦々に至るまで、此大法の弘まり行く大計畫を立てねばならぬことゝ思ひます、

日什上人置文諷誦章卷上

齡八十老比丘　坂本日桓　講述

其二十

性海果分ノ之内證文此の一句七字は能證の本佛の釋尊を擧て所證の妙法を讃歎したる文で有ます偖此の句は法譬交も擧て御書になつたて有ます性海の性の字は理性の性ではなく性躰の性で有ます久遠實成の本佛の釋尊の性躰を指して性といふので有ます海の字は譬を擧たる語て久遠實成の本佛能證の釋尊の性躰には自行の因果と化他の能所の廣大無邊の大功德を具備して堅に三世に高く横に十方に廣く一切衆生をして亳も漏さず濟度利益する事は譬は大海の萬寶を納めて利益を得せしむる事の無邊際なるにたとへて海と申したて有ます次に果分とは久遠實成本地の釋尊は因分未究竟の等覺已下の人にあらず果分究竟の妙覺圓滿の一大圓佛なるが故に果分と申します、復た次に内證とは内身とて自己の身躰を指して内と申し證とは證得とてさとりうる事て久遠實成の本地の釋尊が自己の身は無始事常住本覺本住法の妙法の佛躰なる事を證得したるを内證と申すて有ます、本文の一句七字の隨文消釋は是れまでにして是れよりは上に於て申し置きたる事の三諦の事を辯して聽せませう○偖て次上の句の三諦圓融之法躰と云ふ文を本宗の宗義に依り事に約して辯ずれば三諦の中の中諦は無始の事法身如來が事の中諦と申します空諦は無始の自受用智報身如來が事の空諦と申し假諦は無始の慈悲應身如來が事の假諦と申します、此れが本門所談の事の三諦の法門て有ります次に圓融とは三身即一一身即三の法門の事て中諦の事法身如來に空諦の智報身如來と假部の慈悲應身如來を備へて亳も闕減なく圓滿融即し餘の二諦も斯の如く闕減なく圓滿融即したるを無始事常住事本覺本住法の事智悲の無作三身即一の事の三諦と申して理の三諦は此の事の三諦の中に無始より天然法爾として具備して有ます是れが本地久成の釋尊所證の事の三諦圓融之法躰たる妙法五字の題目て有ます○萬行衆善之都名文此の一句七字は久遠實成の釋尊所證の妙法五字の題目を讃歎して釋したる文て有ます此の五字の題目の中には法界に有るとしあらゆる無量無邊の一切の大功德を亳も洩さず具備して有ます約言すれば法華經本門所證の十妙の中の本佛の釋尊自行の本因本果の萬善萬德の大功德と十妙の中の本佛化他の能化の大功德を悉皆具備して一滴も洩さず收めたる五字の題目なれば讃歎賞美して萬行衆善之都名と御書さになつたて有ます都とは玉篇に總也と有り名とは名目也と有て法華經本門壽量品所顯神力品結要の五字の題目は萬行衆善を總括し收めたる名目なれば都名と御書になつたて有ます○本地甚深之奥藏文此の一句七字は本地久成の釋尊の能證の佛を擧て所證の妙法五字の題目の功德を讃歎して釋したる文て有ます本とは根本なり地とは道場なり謂く久遠實成の釋尊最初開覺根本の道場を本地と申します其所で第二番の成道已來中間今日世々番々に出世して迹中に一切衆生を化導する事は其功全く久遠實成最初開覺根本の道場自行圓滿の功德に依るが故に功を最初の根本の道場に推して本地と御書になつたて有ます次に甚深と申すは釋尊が本地所證の妙法の功德を讃歎したれ辭で久遠實成の釋尊本地所證の妙法は無始事常住事本覺本住法の十界互具百界千如事の一念に事の三千を具足したる甚深微妙の妙法を開覺究竟したるが故に甚深と釋したるて有ます次に奥藏と申すは深くれさむるとに訓じて釋尊が本地所證の妙法は法界の一切の大功德をふかくおさめたるが故に奥藏と申すて有ます○是此レ本尊ノ之本躰也文此の一句八字は上に於て辨明して聽せました大曼荼羅の中央所尊の法の本尊の結釋の文て有ます文面顯著にて分りやすきゆへに辯ヒません今此の結釋の文に就て少々辯釋を費したき意味が有ます此の諷誦章に御講談に成りました本尊に就ては古來の哲匠が種々の名目を附して辯じて有ます其二三の名目を辯して聽せませう一には人法二には躰用三には總別四には本末等名目が有ます一に人法とは中央所尊の題目は所證の法なれば法の本尊と云ふ左右の十界は能證の人なれば人の本尊と申す斯くの如く人法二本尊を分つといゑども所證成佛の法の外に能證成佛の人のあるては有ません所證の妙法に即して能證成佛の人て有れば人法一躰不二の本尊て有ます二に体用とは中央所尊の題目は本地久成の釋尊自行内證の法躰なれば躰の本尊と云ふ左右の十界は本地久成の釋尊化他外用の普現色身なれば用の本尊と稱す是くの如く躰用の二の本尊を分つといゑども自行内證の本躰に即して化他の造用を起したる者なれば体用一体不二の本尊也三に總別とは中央所尊の題目の五字は總体の本尊て左右羅列の十界は別躰の本尊で是の如く總別を分つといえども惣惣於別とて惣の題目の五字は別の十界を惣括し復た別々於惣とて別の十界は惣の五字の題目を各別にしたる者なれば惣に即して別別に即して惣なれば惣別一躰不二の本尊て有ます四に本末とは中央所尊の五字の題目は十界の衆生成佛の根本の法なれば本なり左右羅列の十界は此の題目信唱の功德にて成佛したる人なれば末なり是の如く本末を分つといゑども畢竟所證の成佛の法の外に能證の成佛の人

あるに非ず所證の成佛の妙法に即して能證の十界成佛の人なれば本末一躰不二の本尊て有ます斯の通り古來の學匠達が種々の名目を附して辯じて有ますが是れ等の名目には抱はらず其肝要なるは中央所尊の法の本尊て有ます然るに法の本尊の外に人の本尊を顯示したるに就て二種の意味が有ます一には中央所尊の法の本尊は本地久成の釋尊所證の無始事常住十界互具事の一念三千の本覺本住法の法体を顯示したて有ます故に祖書錄内八卷觀心本尊抄十六に云く今本時ノ娑婆世界ハ離レ三災ヲ出ニ四劫ヲ常住ノ淨土佛既ニ過去不レ滅セ未來不レ生セ所化以テ同体此レ即チ己身ノ三千具足三種ノ世間也文此の祖文は本地久成の釋尊所證の無始事常住本覺本住法を妙判したる文て有ます二には此の法の本尊の外に左右羅列の人の本尊を顯示したるは本地久成の釋尊本因本果實修實證の上修顯得体したる事成の十界互具一念三千の始覺自證法の法体を顯示する爲に人の本尊を顯したるて有ます故に同抄十七其ノ本尊ノ爲レ体本時ノ娑婆ノ上ニ寶塔居レ空ニ塔中ノ妙法蓮華經ノ左右ニ釋迦牟尼佛多寶佛釋尊ノ脇士上行等ノ四菩薩文殊彌勒等ノ四菩薩ノ眷屬ノ居ニ末座ニ迹化他方ノ大小ノ諸菩薩ハ萬民處ニ大地ニ如レ見ニ雲閣月鄕ヲ十方ノ諸佛ハ居ニ大地ノ上ニ表迹佛迹土ヲ故也文此の祖文は本地久成の釋尊本因本果實修實證し修顯得体したる事成の十界互具一念三千の始覺自證法を妙判したる文て有ます是の如く本覺本住法の法の本尊と始覺自證法の人の本尊と其名義には不同有りといえども其法体には毫も不同は有ません所證の境に約すれば法の本尊と稱し能證の智に約すれば人の本尊と名づけたる者にて我が心を以て我が身体の事蹟を證得するのて實に人法一体不二の不思議の本尊て有ます然れども吾人が正意とする所は中央所尊の五字の題目の法の本尊て有ます正意とすると云ふても勝劣有と云ふては有ません唯所證と能證との差別にて所謂眼目の不同にて其体は俱に事成の十界互具一念三千の妙法の法体て有ます抑〻吾が宗祖日蓮大聖人佐渡國に於て佛滅度後二千二百二十餘年の間一閻浮提未曾有の人法一体不二の二十界勸請の大曼荼羅を顯示し中央に題目の五字を書したるは釋尊所證の事本覺本住法を表し左右に十界を羅列したるは釋尊自身所具の十界互具能證の始覺自證法を表し本化の上首上行等の四大菩薩を脇士としたるは本佛の釋尊は久遠實成の佛にして始覺近成の新佛にあらざる事を顯示し其本地所證の妙法は無始事常住十界互具百界千如事の一念三千本覺本住法の妙法なる事を顯し釋尊自身所證の本覺本住法の此の妙法を本化の上首上行等の四大菩薩に付囑し是れを四大菩薩末法に出現し五濁亂漫の世の本末有善難度の衆生の吾人に授與し信念口唱せしめて速に佛身を成就せしめ不信謗法の機には此の妙法に結緣せしめ順逆二緣決定成佛の妙法にして人法一体不二不可思議の大曼荼羅て有ます仰て尊崇し伏して信唱し給えよ學生達

文學博士　三宅雄次郎君序

大僧正　本多日生師著

法華經講義

（既製發賣）

和裝帙入全八册
洋裝背皮全二册
正價金四圓
郵稅金三十錢
臺清韓二十錢增

目次

◎序說●第一章緒言●第二章法華超勝の教義●第三章諸種の法華經觀●第四章天台の法華經觀○第一節三種教相の綱格○第二節十雙權實の巧釋○第三節六重本迹の大旨○第四節三法々躰の解釋○第五節待絕二妙の解釋○第六節一念三千の妙觀●第五章日蓮の法華經觀○第一節本化別頭の教相○第二節但令用實の活斷○第三節應身常住の妙義○第四節佛界緣起の妙旨○第五節究竟圓慈の活釋○第六節聲色爲經の眞義○第七節唯一本尊の光顯○第八節信念成佛の要道○第九節兩善一貫の活論○第十節台當教相の異目○第十一節身讀法華の壯觀●第六章天台講經の要義○第一節四教五時の統釋○第二節五重玄義の妙解○第三節法華釋經の科段○第四節悉檀運用の活釋○第五節文々四釋の廣釋●第七章日蓮講經の要義○第一節日蓮上人の學風○第二節本化獨特の五玄●第八章妙法華傳譯の概略
◎釋文●科段●來意●大意●釋題●文々解釋○通解○妙解○異解○批判○質議○解決○字義○參考○讃唱

法華は天地法界の秘藏、世界群籍の帝王、亞細亞文明の中樞、佛教教觀の實歸にして、佛陀觀、宇宙觀、人身觀、教法觀、行法觀、その他教相教義の全般に亘りて之を調整し、發揮せるもの、苟も佛教の眞意を知らんと欲せば必ず法華經に來るべき也

古今東西の法華經觀を網羅し、特に天台と日蓮との創見を發揮して更に新考案の下に佛教の積極的統一主義を闡明したる本書は實に佛教研究の上に現代及未來の光明たらん矣

（發行所賣捌所は裏面にあり）

文學博士　姉崎正治君序
大僧正　本多日生師編

聖語錄

（既製發賣）

洋裝九百頁
特製金壹圓拾錢
並製金七十五錢
郵稅金拾錢

目次

○第一發心篇○總要○感應○實在○懺悔○道義○推理○第二教相篇○總要○內外對○權實對○絕對判○第三佛陀篇○三德○顯本○應現○体相○智慧○慈悲○功德○力用○權佛○餘論○第四教法篇○總要○第五人身篇○通說○理具○事具○結歸○第六法界篇○通說○迹門○本門○結歸○第七本尊篇○總要○諸宗○佛陀○教法、總持、觀念○本佛の三輪○第八行法篇○總要○信仰○安心○道義○總要、報恩、慈悲、戒法、人道、忠君、愛國、孝養、師長、夫婦兄弟正直、勤勉等○弘通○第九得益篇○總要○絕對の益、順次成佛、即身成佛、女人成佛○相對の益○第十批判篇○總要○迦葉、阿難等○龍樹天親、無著○天台、妙樂、傳教、慈覺、智證、末學○羅什、法護○光宅、嘉祥、玄奘、慈恩（涅槃、三論、法相）○華嚴宗○眞言宗○淨土宗○禪宗○律宗○第十警策篇○對內○對外○第十二訓育篇○第十三祖傳篇

法華は佛教の綜合歸一を宣し、聖祖は各宗の積極統一を唱へたるもの、その教義の深遠に、且多方面にして、眞意を正明に會得し難きは、實に宗の內外に於ける古今の嘆聲なりき。本書は法華の三部及祖書全集に就て、之を整然たる組織の下に類聚編成せられたるもの、研究の士も布教者も、信徒も必ず一讀すべき日宗の聖典なり

發行所　東京市淺草區南松山町　統一團
賣捌所　東京市京橋區南傳馬町　須原屋
東京京橋南傳馬町三丁目　泰文社
仝麻布飯倉五丁目　森江書店
仝淺草廣小路　淺倉屋書店
東京府荏原郡池上村　日宗新聞社
京都寺町二條妙滿寺中　法光報社
大賣捌所
京都古門前繩手三吉町　村上貞藏
大坂東區心齋橋安土町北　加々善書店
横濱市蓬萊町一ノ三　統一新聞社
岡山市下ノ町　入江勝十郎
仝市上ノ町　久城茂太郎

岡山顯本法華宗篤信會對同地日宗傳道會法戰記

篤信會員

維時明治三十九年五月岡山市東田町蓮昌寺內日宗傳道會に於て東京より石川惺亮氏を聘し、五日六日の兩日蓮昌寺に於て「本尊の實義」「別勸請の可否」「一致勝劣の辨」と題し大演說會を催しぬ、是より先き岡山日蓮宗に於ては多年吾が顯本法華宗が別勸請の非義を糺し、本尊の實義を唱道せるより、一部の僧侶は大に覺醒し、中には斷然本尊の改善を實行せし寺さへ現はるゝに至り、日宗傳道會の如きも改革の一部として現はれ、即ち昨秋九月池上栴檀林講師清水梁山氏を聘して蓮昌寺に二日間、三門妙林寺に一日演說を催したるとあり、聞く處によれば今回石川氏を聘するに至りたる次第は、今春岡山地方日宗寺院集會の折傳道會常任講師たる二日市町妙勝寺住職大橋某が雜亂勸請を改革すべき旨發議し、三門妙林寺主某これを贊助したるより、傳道會長蓮昌寺住職高見某は大にこれを憂ひ、宗用の爲め上京せし次手を以て雜亂勸請の辯護者として遂に石川を頼み來るとはなれり（初め傳道會は松森靈運を迎へんとせり）今左に石川が演說の大要を錄せん

彼曰く（一）本尊には二義三種あり、一義には本來尊重の義これは十界の曼陀羅を指す（第一種）即ち觀心の本尊にて吾人の心の寫眞なり、故にこの本尊は禮拜供養恭敬すべきものにあらず、二には根本尊崇の義にて別ちて二とす、一には佛本尊（第二種）即ち教主釋尊と上行等の四菩薩なり、二には法本尊（第三種）即ち南無妙法蓮華經なり、この第二種第三種の本尊は香華燈明を捧げ禮拜供養恭敬尊重すべきものなり、されば木像式を捨てゝ十界の曼荼羅を本尊とするは不可なり、蓮昌寺妙林寺等の須彌壇を見よ、中央の題目は法本尊なり、左右の釋尊四菩薩は佛本尊なり、その他の諸尊等は即ち觀心の本尊なり、故に二義三種の本尊は日宗寺院に具備す、然るに田中智學や顯本法華宗が只十界のみを用ゆるは本尊の實義を知らざるなり、（二）別勸請は數の多き程良し妙音は三十四身觀音は三十三身を現じて衆生を化益す、爾前經にも帝釋が野干を崇拜せし例あり野干すら利益あればこそ天帝が拜するにあらずや、されば稻荷を拜する可なり狐狸にても何物にても祭り拜みて少も差支なし、又祖師に厄除眼病安產等の種々の名を付けて祭るも良し各その求に應じて種々祈願を致し利益を受く、これ諸人を誘引する方便なり、佛像を毀るものは不具者となり、ホコラを毀つものは災害に罹る（三）一致勝劣の辯「本迹の相違は水火天地の違目なり」と御妙判に明文あればこれは法華宗の小僧も尙ほ能く嗜んず何の異論かあるべき、然るに勝劣派が妄に取本捨迹するは不可なり、決して勝劣に固執すべからず開會さへすれば迹門も本門も一切一に歸するなり云々、彼又曰く予は喧嘩を好まず故に從來內輪喧嘩をなさず、祖師は四大格言を唱道せられ大々的折伏を行せられたり、然るに田中や顯本は內輪喧嘩を始めたり、彼れ田中智學は無學文盲の者なり然るに彼れは學者振りして書物を著はし勅語玄義などと稱へて人界帝王の語を佛敎の瀉與たる五重玄義を用て解釋するは不都合なり、又統一の天業といふ書中に卍字は佛敎の根元なりといへどこれは唐の則天武后の時始めて佛像の胸に付けたるものなりこれを知らぬは無學の至なり又彼の清水梁山は如何彼れは日本國の祖先を娑伽羅龍王なりなどいふ人間と畜生との差別を辨へず日本國の祖先を畜生なりとは不屆千萬無學文盲なり　彼輩が書ける雜誌は廣告雜誌なり外道の說なり、故に予は彼等の罪障消滅の爲めに妙宗等の雜誌を大弓の射的としつゝあり、予は十三年間一代藏經を讀み百六十五卷の閱藏錄を作れり故に何人を相手としても立

證する材料は充分に調べ盡したり日本國には予に及ぶもの一人もなし、併し未だ喧嘩を仕樣とはせず、然るに昨五日夜顯本の本多が本行寺にて自己の信徒に對して曰く、石川を相手にする勿れ彼れは宗敎界の毛蟲なり、彼れの邪說は信ずるに足らずと誤魔化せり、本多は予の說に反抗すること能はずして只信徒の手前を繕ふのみ（記者曰く本多師は前月二十七日岡山を發し歸東せられ、五日頃は本宗々會開會の最中なり、咄石川何ぞ虛言を吐くや）予は喧嘩を好まず併し毛蟲といふ宗以上は最早默止せず破斥を加へん、抑も顯本法華宗といふ宗名は已に誤れり祖師は單に法華宗といはれたり、顯本とは迹門に對する語なり只顯本の一邊のみを採るは不可なり、予顯本の綱要の始中終を一見せしに皆無茶なり小林も本多も亦無學文盲なり、第一經卷相承といふは缺なり宜しく御書相承と改むべし、獨得の妙とは何事ぞ、禪宗を破する條下に可說門不可說門云々とあり予若し禪宗ならばこれを反駁すべし、祖師を大菩薩といはず聖人といふは否なり等云々

以上は蓮昌寺等に於ける演說の要領なり、彼れ石川は岡山四近の各地に巡敎してホラを吹き續けたり、彼れの唯我獨尊說に對しては御流義派の小宮山三學氏より質議を申込みたりといふ、吾が篤信會にては元來彼れが性行を熟知するが故にその儘不問に差措く方針なりき、然るに迷信の盛なる、愚民の多き、忽ち彼れが邪說に誑かされ、殊に日宗傳道會が特に東京より招待し來りたる大學者なりと妄信して益す迷信を募らんとするに至り、從て年來吾人が唱道しつゝある正義に對して懷疑を生し來り、又吾が篤信會員須山茂三郎氏が從來その同業たる日宗傳道會員河本種太郎氏に雜亂勸請を改革すべく說きつゝありしが、河本は石川の邪說に力を得て自己の信仰を正當と思ひ須山說を否定せんとするより、遂に彼れが邪說と吾が正義とを討究せんが爲め討論會を催ぼさんとを約するに至れりこれ實に五月八日なり、須山氏は即ち同志と謀り我本行寺能仁事一師に此旨申出許諾を得るとなり同十日討論關係人として久城茂太郎、宇垣卯三郎及び須山の三名は河本に示談し、河本より石川に交渉せしむるとなり、翌十一日三名より河本に宛て討論定約の義成立する樣書面を發して返答を催したるに、十三日に至り石川は承諾せり故に篤信會より更に書面を以て傳道會に申込まんとを河本より回報せり、依て即刻日宗傳道會長へ宛て左記論第一號の書面を發したり

論第一號　拜啓今回貴會ニ於テ招請相成居候石川惺亮師演說ノ趣旨ハ吾ガ篤信會ノ布敎傳道ノ本旨ト全然相反スルモノト確認致候ニ付則チ本月八日本宗信徒須山茂三郎ヲ以テ貴會員河本種太郎氏ヲ介シ討論定約ノ義巨細申込候處幸ニ御快諾被下候由正法發揚上慶賀此事ニ御坐候就テハ右討論定約ニ對シ貴會並ニ本會ヨリ夫々委員選定ノ上定約案協定ヲ要シ候故右定約協議ノ時日場所並ニ委員三名御決定相成至急御通報ヲ煩シ度茲ニ更メテ書面ヲ以テ此段御照會致候也　但シ本件ハ御協議ノ上速ニ御報相成度又本會ヨリハ信徒久城茂太郎宇垣卯三須山茂三郎ノ三名ヲ本文ノ委員ニ選出致候間御了知相成度候　明治卅九年五月十三日　山崎町本行寺内　顯本法華宗篤信會幹事久城茂太郎宇垣卯三郎須山茂三郎　東田町蓮昌寺内日宗傳道會高見日昌殿

右交渉の次第は已に新聞社の探知する所と爲り、十三日の山陽新報十四日の中國民報には次の如き記事を掲載せり

●日蓮宗と顯本法華宗の衝突　日蓮宗蓮昌寺派にては當市東田町蓮昌寺及び吉備郡高松村高松稻荷等を手始めとし縣下各地に於て演說會を開きて狐、狸、蛇等を祭るも差支なし信仰の點に於て何れの宗敎も同一なりと論じ延いては顯本法華宗を攻擊するのみならず果ては人身攻擊を爲し居れるを以て顯本法華宗にても捨て置かれずとなし同宗篤信會員は過日集合して協議したる結果蓮昌寺の敎徒たる河本種太郎外一名を介して目下東京より來れる石川布敎師に向ひ

會見を申込たる由なるが若し石川師にして之を承諾せば內山下旭倶樂部を以て會場に充て各々三名の立會人の外六十名の傍聽者を入場せしめ、各自の討論時間は三十分を越えざることゝして法論を闘はす筈なりと

●佛敎演說會　當市顯本法華宗にては來る十五日は午後二時より新西大寺大福座に於て翌十六日より山崎町本行寺に於て佛敎演說會を開催する由なるが辯士は能仁事一師にして演題は『現日蓮宗の邪義を論告す』なりと云ふ（以上山陽）

●法論衝突　本縣の顯本法華宗にては日蓮宗たる當市東田町蓮昌寺、備中高松稻荷等が人間以下たるもの即ち狐の如きものを勸請するは是れ雜亂勸請にして法義に合はずとなし常に批難し居れるが蓮昌寺派にては放任すべからざる事と爲し過般東京より石川惺亮師を迎へて同寺に於て辯護の演說を爲さしめ一切妙法に歸するものなれば狐を祀るも別勸請にして何等の不可を見ずと說き顯本法華宗を罵詈し剩へ人身攻擊を始め縣下の蓮昌寺派の寺院に於ても石川師巡敎し同樣の佛敎演說を爲し居れるより當市に於ける顯本法華宗篤信會員は過日會合して種々協議の結果局外の場所に於て法論を闘はし兩者主張の正邪を決すべしと爲し蓮昌寺の檀徒たる河本種太郎、大賀貴子造兩氏を介して石川師に會見を申込たり此交渉成らんには來る廿日頃內山下旭倶樂部に於て兩派の討論あるべし兩派より判者及び立會者を撰定し傍聽人は雙方より十五人づつを許す筈なれば當日の會合は頗る注目に値するものあらん因に當市顯本法華宗にては石川師の演說に對抗する爲め明十五日及び明後十六の兩日午後二時より佛敎演說會を開く事と爲りたるが會場は第一日は新西大寺町大福座、第二日は山崎町本行寺なり辯士は能仁事一師外數名にして能仁師の演題は「現日蓮宗の邪義を論告す」なりと云ふ

次て左記論第二號論第三號を發してその回答を促がせり

論第二號　本日論第一號ヲ以テ討論定約ニ對シ貴會ヨリ委員三名選定、協議ノ時日、場所御指定ノ上至急御通報相成度旨御照會致置候處右ハ最早夫々御決定相成候事ト存シ御返報相待居候元來本件ハ曩ニ申述候如ク本月八日河本氏ト交渉致シ即チ立會討論御承諾相成候由以來已ニ六日ヲ經過シ其ノ間往萬時日ヲ徒費致候次第ニ有之依テ速ニ御決答相煩シ度再應此段御照會致候也　追テ只今兩人本書ヲ携帶差出候間此者ヘ御返書御渡相成度若シ即時其手續運ビ難ク候ハヽ本日午後十一時迄ニ必ラス御決答相成度此段申添候也　顯本法華宗篤信會討論定約委員（三名連署）（五月十三日午後九時）（高見宛）

論第三號　昨夜九時論第二號ヲ以テ討論定約ノ件ニ付速ニ決答相成ルベキ旨再應照會候處今ニ何等御返報ニ接セス然ルニ聞ク所ニ據レハ吾ガ篤信會ヨリ討論申入ニ對シ直ニ承諾ヲ與ヘタルニ腰ヲ拔カシテ其後返事ナシ抑ト稻荷妙敎寺ニ於テ石川師演說アリタル趣斯ク一方ニハ事實ニ反スル演說アルニモ拘ハラズ貴會ニ於テハ毫モ當方ノ申入ニ對シ應答之レナキハ頗ル怪訝ノ至ニ有之若シ貴會ニシテ一片道念ノ存スルアラバ當方ノ督責ヲ待タス宜シク進テ應答アルベキ筋ト存候加之今ヤ市內ノ新聞紙ハ已ニ相互交渉ノ趣ヲ報道シツヽアルナリ須ラク此際躊躇逡巡スルコトナク決然何分ノ義大至急應答有之度再三此段及御照會候也　追テ貴會ニ於テ萬一協議纏リ兼ネ返報延引候義ナラバ其旨書面ヲ以テ御明答相成度申添候也（五月十四日正午委員連名高見宛）

然るに尙ほ何等の答なきを以て遂に十四日夕刻委員自から蓮昌寺に押掛け親しく高見に面談したる結果、十五日午前に左の回答書を入手せり

對論締結委員御報告　河本種太郎　大賀貴子造　間部昌孝

前文省略陳ハ今般本會ニ於テ本尊ノ實義演說ニ對

シ貴會員幹事久城茂太郎殿外二名殿ヨリ本會ヘ宛御討論御申込ニ付直ニ御快諾申上仍而本會ニ於テハ右三名ヲ對論締結委員ニ撰定候間本月十七日(舊廿四日)午前第九時迄ニ岡山市東田町本成院ヘ御來會被下度此段及御報告候也　岡山市東田町日蓮宗傳道會高見日昌　顯本法華宗篤信會能仁事一殿

依て右書面を受領すると共に會合場所に就て左の意見を申込たり

委員協議ノ會場ハ公平ヲ持スル爲メ御申越ノ本成院ヲ避ケ東中山下四丁目山左樓ニ於テ會合致度當方ノ意見開陳致候條御承知相成度(山左樓ニテ不都合ニ候ハヾ寺院及ヒ相互信徒ノ宅ヲ除クノ外相當ノ場所御申越相成度候)云々

同夜河本より場所の事に就き須山へ申入あり、依て十六日論第四號を以て山左樓は當方にて借入方取計ひ明十七日午後一時より會合することに申送りこれにて討論定約協議までの交渉は一段落を告げぬ

斯く一方には討論の手續を運びつゝあると同時に、一面社會を警醒すべく公開演說會を催すことゝし、市内の要所に無數の廣告を掲出し演說會場前には大看板を出し要衝には木札を建て、市外各村には三千餘枚の廣告箋を配付し、尙ほ十三日の山陽新報には百二十行の大廣告を掲げたり

さても十五日大福座に於ける演說會には定刻前より已に聽衆群集し來りぬ、警察署は特に泉岡山署長自から部下を引率して臨監あり、石川を始め傳道會員は招待に應し來會して指定の席に着き、僧侶席には日宗は勿論各宗派の僧侶來會し、婦人席も充滿し、午後二時を報ずるを待ち直ちに開會せり、會主として美作湯之郷の篤信家鳥越勝一君登壇「開會之辭」として石川說は十九世紀の舊思想にて人格も亦時代に後れたりとて滿場の喝采を受け、傍聽者の注意條項を述べ、次て和氣本成寺主山本容廣師は「一致の迷見を斷破す」と題し、本迹の違目一致者流の誤解を說き、優陀那の歸宗論を駁し、取本捨迹といへる石川の誤解を論し、一致の邪僧練意の行跡を擧げて邪義に陷れる古例を示し、一致の邪義は佛祖の大罪人なることを論詰せらる、次に能仁師登壇ありて二時四十分間滔々現日蓮宗の邪義を論告せられたるに、滿場始終拍手喝采を以て傾聽し六時前無事演了せられたり、時に幹事の發聲にて本宗の萬歲を三唱し閉會を告げぬ、會場は新築の大劇場にて聽衆無慮二千餘名、今能仁師の演說を左に摘記せん

現日蓮宗の邪義を論告す

本尊の雜亂を責む

別勸請の非義を糺す

本迹一致の誘法を論す

能仁事一

この演說會を開きたる動機は日宗傳道會が今般東京より石川惺亮君を招聘して蓮昌寺を始め各地に布敎せるに起因す、予曾て東京に修學の折石川君は非常なる强折伏家として石川將軍と自稱し陣羽織を著し馬乘して運動せし人なるが、今回遙々岡山に來りたると故定めて立派なる名說も出て地方人の信仰狀態は爲めに正しき方に進むべきかと豫想せしがこの豫想は終に水泡に歸したり、予は石川君の說を聞かざれど信者の二三は聞きたるものあり又筆記をも所持す、その說に據れば本多田中清水等は勿論優陀那の如き皆無學文盲のものなりと或る一部の人々はこれを聞て大に滿足しつゝありといふ、思ふに人各自重心を持ち自己を重ずる心あればこそ大事業も成効すべきものなれど、石川君の如きは餘りに唯我獨尊を極め込み過ぎたる爲め六日の蓮昌寺の演說には內部に衝突を來たしたり、そは昨秋傳道會が招聘せし清水梁山君を無學なりと罵りし爲め動搖を來したる由にて、而かも清水君は兎に角池上梅檀林に敎鞭を取り又書を著はして後進を誘掖しつゝあるが故に世人は彼れを日宗內一流の人物と思へり(ヒヤ〳〵、

石川低音に曰くノオノオ)さればある僧は石川說は石川一流の學說として聞くべしといひ、他の一人は傳道會は學說の研究會にあらず石川說を聞きて信仰を確立すべしと論じ、議論紛々として徹宵激論を闘はしたりと聞く、要するに石川君の演說は人身攻擊の頂點に達したり、若し夫れ人身攻擊を能事とせば寧ろ壯士を傭ひ來る方巧なるものあらんか今若し石川君が東京に於ける從來の行動を暴露するならば恰も馬糞の投げ合となりて最も見苦し(喝采)宗敎家として採るべき態度は學說を闘すにあり(喝采)故に予はこれより石川說に對して能くコタへる樣分かる樣に論駁を加へんとす(大喝采、謹聽)

或人曰く顯本の僧侶は演說の際經文書籍は携へて出づれど、石川は流石に十三年間一切經を讀みて百六十五卷の閱藏錄を作れる學者程ありて經文等の文句を暗誦するは感心なりと、然るに予も亦書物を携へて出づる流義なり、石川の如き學者にはあらず(拍手)されど演說に一々文證を引くは言論の上に最も力ありと信ず、予は本年一月信徒に告げて曰く本年は必らず宗敎問題勃興すべし、顧れば明治十九年には故兒玉上人斷然起て吾が宗門の改革を唱道せられ、二十九年には四大格言事件起れり、而して今年は三十九年なり豈に有望の年にあらずやと、果せる哉今回東京より石川君の來れるあり、而して今茲に演說會を開き次て宗義の討論を約するに至れり、思ふに大戰爭の後には必らず宗敎と敎育との發達を見ると歷史の證明する所なり、予曾て東京に遊學せし折雜亂勸請に就ては日宗の佐野文高氏等と二州樓に於て對論を爲し、此經難持問題に就ては井上日也氏と戰ひたるとありき、或人評して曰く坊主問答聞いて見りやおかし何處が尻やら頭やらと、さればこの冷評に鑑みて今回石川君と宗義を討論する場合は双方愼重の態度を取り喧擾を避け明確に論議して世の笑を招がざる樣品格能く時代的に實行せんと欲す、祖師が公場の對決を望まれたるは畢竟有耶無耶の中に正義を沒了せず正明に判斷せしめんとの御主意に外ならず、吾人は須らく祖意を體して互に德義を重じ正々堂々の論陣を張り聽衆をして論議の有益なるとを感せしめざるべからず、斯くの如くにして初めて問答の効果を顯し正法發揚上資益多大ならん、今茲に石川對討論事件の經過を述べて流言俗語に惑はざる樣諸君の參考に供へん(これより前記討論交渉の始末を敷衍せらる)

是より本題に入らん、現今の日蓮宗を邪義と呼ぶは情に於て忍びざる處なり、されど現日宗が宗義を誤まれるを見ては默止するを得ず、さればその謬妄を糺すと寧ろ男子の本領にあらずや(拍手喝采)茲に一の夢物語を述べん現日宗の迷信狀態は殆ど天理敎と擇ぶ處なきまでに墮落せり、これを慨きて演手に一人の改革家出て山手にも一人贊成して賽錢箱を撤去したり(喝采)この二人は共に有力家なり演手は風暴くして今や危險に瀕し折角の改革も破れんとす、こはパンの爲めに態々人を傭ひ來りて改革を破壞せんとするなり(拍手喝采)今頃迷信を辨護鼓吹するとは已に業に時代後れなり(拍手喝采)諸君よ彼れ等の爲めに我岡山市を攪亂せられてはならぬ、或學者評して曰く我岡山は靈界の問題を研究するに於て優に吾國の首位を占むと、されば岡山市民たるもの何ぞ迷信者流の侮蔑を甘受して可ならんや、第一に現日宗僧侶の狀態を見よ、彼等は無主義なり無節操なりその理想低くして固陋なり、彼等の信仰には毫も活力なし、西洋歷史を知るものは必らず宗敎に活力あるとを認むるならん、活力なき宗敎活力なき信仰は何事も遂行し得ざるなり(拍手喝采)第二に彼等は常識を缺き智力を缺けり、その證據は日宗內には淫祠充滿せるにあらずや、迷信盛なればその國必らず亡びん、例せば韓國には巫祝にトはせて政治を斷ずるが如き誠に適證なり、日宗の大本山池上本門寺には穴を穿ち狐を祭り、その筋の注意を受けたるも尙ほこれを徹回せず、豈に慨嘆の至ならずや、信仰が時代にも國家にも適應せずんば眞正の宗敎にはあらず(喝采)第三は日

宗の中には曲學阿世の徒あり現金主義の信者あり御陰主義のものあり、又醫藥代用主義あり所謂病に醫藥を用ひずして只管神佛に當病平愈を祈るものこれなり(喝采)或る醫學博士曰く八十八ヶ所の大師巡りが團子を喰ふが如きは流行病を蔓延せしむる媒介なりと、これ等の類須らく掃清せざるべからず而して現日宗の狀態亦この類なり邪義といはざるを得んや(喝采)第四には自己を忘れたる信仰、日宗徒は自己の尊重すべきものたるを忘れたり、凡そ法華經には十界互具一念三千久遠實成等の高遠秀妙なる教義あり、これをテーブル論の如く心得、自己の體内に佛性あり佛種あるを覺らざるは至愚といはざるべからず、所謂自己を忘れたるものはその理想低く向上進歩の觀念なし、かくては國家社會の隆昌を期すべからず、第五は本尊の雜亂なり、こは蓮昌寺又は稻荷と吾が顯本宗との決戰點にして諸君が聞かんと欲する所の議論にあらずや(喝采)これ則ち現日宗が腐敗せる原因なり、雜亂のモデルは高松稻荷なるべし蓮昌寺にも賽錢を打つ場所數十あり、いかに彼等が怒り厭ふともこれを匡して信仰の歸一を計らざるを得ず、第六は凡そ信仰には道を正し法を明むるの觀念を要す、これ實に丈夫の本領と謂ふべし、徒らに道の多きを誇るは愚にあらずして何ぞ、宜しく大道正法を信ずべし、淫祠崇拜の信仰は高潔靈妙の信念を忌避せしむ、第七凡そ信仰には標準を定むべし、所謂尺度は以て木材を直ふし準繩は以て家屋の傾を匡すと、日蓮聖人の教義を信ずるもの又何ぞ標準を定めずして可ならんや、石川君が十三年間藏經を讀みたりとて彼の證眞が十五遍讀めるは天台の讀める一遍にだも如かずといへるに類せずや(喝采)廣學の爲めに天狗となり增上慢を起すに至る誡めざるべけんや、第八には信仰の境的を選擇するを要す、信仰の對象は必らず人間以上のものを擇ぶべし、ワン〳〵コン〳〵(大笑)の如きものは信仰すべからず、信仰は向上性を有し進歩發展を意味するものたり(拍手喝采)禮拜する對象は自己の體内に映寫すと思へ、例へば幡隨院長兵衛の傳を讀めば彼れが俠氣を寫し、楠公の忠誠を聞てこれに感ずるが如し、されば信仰の對象は最も優秀勝妙のものを選ぶべし賤劣鹿惡のものを採用する勿れ、日蓮聖人は本門の本尊を以て信仰の對象と定められたり、吾人はこれ以外何物をも信仰すべからず、信心の水澄めば利生の月必ず哀みを垂れ守護し給ふと敎へられたり、二心三心となりて信心の水濁るならば何の利生がこれあらんや誡めざるべけんや

是より石川氏が本月五日六日の兩日蓮昌寺に於て演說せる邪義を論駁せん、彼れは本尊に二義三種ありといひ一には本來尊重の義にて十界の曼陀羅則ち觀心本尊、二には根本尊崇の義にて佛本尊法本尊の二種とす、この說未だ珍重するに足らず古來已に宗學者は本尊に三義三種を說けり、世間に約して根本尊崇の義を立て、本体に約して本來尊重の義を立て、絕待に約して本有尊形の義を說く、石川說は十界の曼陀羅は觀心の本尊にて心の寫眞なれば禮拜供養恭敬すべきものにあらずといふ、不信心のものはこれを聞き亳も意に介せず、而かも信仰あるものは惑耳驚心したり、己に上伊福の日宗信者磯島君が本成院に於て石川君に質問せる要點は

(磯島問)予は從來十界の本尊を本門の本尊と信じ信徒より到來品ある場合はこれを寶前に捧げたり、然るに貴說には十界は觀心本尊なれば禮拜供養すべきものにあらずと說かれたるが如し、果して然るか(石川答)然り

(磯)妙法曼陀羅供養抄には「妙法蓮華經の御本尊供養候」とあり、この會通如何(石)には根本尊崇の中の法本尊供養の義なり

(磯)然らば同抄に正像未弘の本尊とあり如何(石)それは佛本尊法本尊とも未だ弘まらざるとをいふなり

(磯)然らば日女抄には御本尊に供養物を捧げられたるは十界の曼陀羅と見ゆ如何(石)此時大本遺文錄を出さしめ篤と

見て曰く、如何樣さうも取れる(滿場拍手)

(磯)顯本や田中は日蓮聖人の宗旨は三大秘法なりといひ乍ら十界の曼陀羅のみを採用するは三大秘法を具備せずと說かれたるが如し、予文義意に涉て案ずるに十界を以て本門の本尊と認めらるゝなり如何(石)十界は本尊なれど法本尊佛本尊を具備せず、十界の文字は蚯蚓がウネクル樣なり故に木像に限る

(磯)併し御妙判には文字は佛なり一々の文字には三十二相八十種好を具へたりとあり、然るに木像の方は梵音聲抄を見れば三十一相はあれど梵音聲の一相を缺くが故に經卷を木像の前に備へよと示さる、然らば文字本尊と木像とを比較せば文字の方勝れたりと覺ゆ如何(石)文字に佛の相好ありといふは佛眼を以て見たる話なり、凡夫の我等は矢張黑き文字と思ふが故に衆生の爲めには木像の方信仰進むなり

(磯)然らば實體の上よりいはゞ文字本尊と木像とは孰れか勝れたるや(石)予は得益の上よりいふなり

(磯)予は文字の方勝れたりと思ふ、木像は三十一相は具へ得べしそれも巧妙なる佛師を待て始めて具備し得ん、今日の木像は拙劣見るに足らず尊崇の念本心より起らず、予の如きものを導くには如何にせらるゝや(石)祖師已に木像を造らる予は只これを取るのみ

(磯)本尊に二義三種ありそれを纏めたるが寺院淨壇のものなりと說かれたり、然るに文字の方にも亦所謂二義三種具備せるにあらずや(石)文字の方は觀心の本尊なりと人皆信せり、これには二義三種具はらず寺院の分には具はれり

(磯)文字の方と寺院の分と少も變りなしと思ふ、木像に具はるとせば紙墨にも亦具はらん如何(石)それは君が先入主となり居る故、然か思ふなり (笑)

(磯)四菩薩造立抄には四菩薩造立のことあり、釋迦佛供養抄には釋尊を造られたること見ゆ、思ふにこれ等は一機一緣の爲ならん(乃至)今の寺院の粗雜なるものゝ優にては予は信ずるを得ず、祖師が今の寺院の通り製作せられたる證ありや(石)これは中古の先師が頭を痛めて祖意に叶ふ樣に作れるなり

(磯)然らば先師は本尊を何より執りしや、予思ふ祖師已に十界を弟子壇那に授けらる、故に吾人は十界にて足れり盡せり、貴說の如く十界を蚯蚓の如くに思ふものが金綺羅する方良からんとて木像に替へたるにはあらざるか、尙ほ反證等あらば聞かんと欲す(石)先入主となり居るが爲めなり云々

かく石川說は木像に限るといひ、釋尊と四菩薩を佛本尊と稱し、優陀那が人本尊といふは外道の說なりといひ、佛本尊の證文として報恩抄三大秘法抄本尊抄の一節四菩薩造立抄等を引き、南無妙法蓮華經を法本尊とし本尊問答抄等を引く、この佛本尊法本尊には香華燈明等を捧げ禮拜恭敬供養崇重すべきものなりと敎ゆ、又本尊實義の解決としては寺院須彌壇にある中央の南無妙法蓮華經は根本尊崇の法本尊、左右の釋尊本化の四菩薩は佛本尊、その他の諸尊は觀心の本尊なりといふ、この石川說は自殺的論法なり、何となれば本尊抄には其本尊の體たらく本地の婆婆の上に寶塔空に居し、塔中の妙法蓮華經の左右に釋迦牟尼佛多寶佛釋尊の脇士上行等の四菩薩、文殊彌勒等の四菩薩は眷屬として末座に居し迹化他方の大小の諸菩薩は萬民の大地に處して雲閣月卿を見るが如し、十方の諸佛は大地の上に處し給ふ迹佛迹土を表する故也云々

とあり、然るに石川說は文殊彌勒等は觀心の本尊なりとして拜むべきものにあらずといひて迹化の菩薩を押へて却て狐狸を拜めよと敎ゆるは何事ぞや、日蓮聖人が敎示せられたる大本尊に妄りに區別を付して佛本尊法本尊觀心本尊抔と名つけ其中の觀心本尊は拜むべからずと云はゞ、いかにして大本尊

を拜さんとするや、石川の如きは大事の本尊を破毀するものなり、これ餘りに曲解なり（拍手大喝采）聖人は「日蓮が魂を墨に染め流して書きて候ぞ」と宣べ給ふ、然るを蚯蚓がウネクルとは無禮極れり（拍手喝采）これは逆上したる考にては到底判別し得ざるなり、石川獨り自慢すれども聖人より見れば彼れは小僧なり學佛法の外道ならずや（喝采）これで一本（大笑）石川は頻りに十界々々と非難するが、こは何を目的として反抗しつゝあるか、吾が顯本宗には十界とは呼ばず本門の本尊又は妙法の曼陀羅といふ、然るに日蓮宗の綱要を見ればこの通り（この時綱要を示さる）三大秘法を說ける中に十界々々とあり、故に石川が力瘤を入るゝとも吾宗には何等の影響なし、却てこれ蓮昌寺派が奉戴する所の管長が書ける綱要の說を非難するとなる故同士打なり（大笑）

次に別勸請論の反駁に移らん、石川說の要を云はば別勸請の數は何程ありとも差支なしと、石川君が妙林寺へ演說に行ける時須彌壇の曼荼羅を木像の後方へ隱さしめたりといふ、妙林寺の住職は人が良過ぎて話にならず（喝采）折角妙林寺が菩提心を起してヤット本尊の改革を遂げし處へこの始末とは何事ぞや呆れて攻擊する力拔けたり（大笑）又日宗傳道會が起りしは改革の爲めならん、かくの如き惡事を傳道せんが爲にはあらざるべし、會員たるもの夫れ何ぞ奮起せざる、予が今別勸請に就て反駁を加ふるは道の爲なり厭な顏を爲す勿れ（喝采）偏に信仰の純正を望むのみ、石川說に據れば法華經の中の七八兩卷を顯本は見ずいひ、其證として七の卷の妙音の三十四身八の卷の觀音の三十三身を擧げ、かく種々に姿を變ずるが故に何を拜するとも構はずといふ、然るにこの三十四身三十三身は拜まさせんとて變化せらるゝにはあらず正法を信せしめんが爲めに種々に形を現し給ふなり、石川の引證は實に無法なり毫も別勸請の立證とはならず全く素人だましの法門なり（喝采）今本經を讀で妄說たることを知らしめん（拍手）

七の卷妙音品に曰く、是の菩薩は種々の身を現じて處々に諸の衆生の爲めに是の經典を說く、或は梵王の身を現じ（乃至）是の妙音菩薩は能く娑婆世界の諸の衆生を救護する者也、是の妙音菩薩は是の如く種々に變化現身して此の娑婆國土に在て諸の衆生の爲に是の經典を說く

八の卷普門品に曰く、觀世音菩薩は云何して此の娑婆世界に遊び云何してか衆生の爲めに法を說く方便の力其事如何（乃至）是の觀世音菩薩は是の如き功德を成就して種々の形を以て諸の國土に遊で衆生を度脫す

又曰く、觀音妙智の力能く世間の苦を救ふ

又日蓮聖人の妙判を示さん、日女抄に曰く

妙音品と申すは東方の淨華宿王智佛の國に妙音菩薩と申せし菩薩あり、昔の雲雷音王佛の御代に妙莊嚴王の后淨德夫人なり、昔法華經を供養して今妙音菩薩となれり、釋迦如來の娑婆世界にして法華經を說き給ふにまいりて約束申して、末代の女人の法華經を持ち給をまもるべしと云々、觀音品と申すは又普門品と名づく、始めは觀世音菩薩を持ち奉る人の功德を說きて候此を觀音品と名づく、後には觀音の持ち給へる法華經を持つ人の功德をとけり此を普門品と名づく

法華經の七八兩卷と御妙判にはこの通り說かれたり、然るを三十四身三十三身を說かれたる故に何を拜むとも良しと聞き素人は十分意味を辨へずして一も二もなく欺むかれたり、又初心成佛抄に曰く

又藥王菩薩藥上菩薩觀音勢至等の菩薩は正像二千年の御使也、此等の菩薩達の御番は早過たれば上古の樣に利生あるまじき也、されば當世の祈を御覽せよ一切叶はざる者也、

末法今の世の番衆は上行無邊行等にてをはします也

昔は惡七兵衞景淸が觀音を祈りて禁獄の身を脫れたるとはあれど今の世は利益なきと此の妙判にて明瞭なり、又三澤鈔に

は

然るに此法門出現せば正法像法に論師人師の申せし法門は皆日出てゝ後の星の光巧匠の後に拙を知るなるべし、此時には正像の寺堂の佛像僧等の靈驗は皆きへうせて但此大法のみ一閻浮提に流布すべしとみへて候

此法門とは聖人が魂を墨に染め流して書き給ひたる本門の本尊、本門の戒壇、本門の題目、この三大秘法を指す、この法門現はれたる以上は正像二千年間の寺堂佛法僧等皆利益消失せて只此大法のみ世間に弘まるべし（大喝采）然るに日出でゝ後に尙ほ星月の光を慕ふて別勸請を爲すは愚の至なり、已に本門の大本尊出現したる後は幾千萬の星光月光は一に皆この大本尊の日光中に攝收せられ統歸せらる、されば三十三身三十四身の如きは數量の上に於ても已に不足なり、上行菩薩一人を擧ぐれば六萬恒河沙の菩薩を代表し得るにあらずや（喝采）天照太神は實に天神七代地神五代の神々を代表せらるゝのみならず八百萬神を統攝し給ふ、されば大本尊の中には一切の神一ももれ給はずと日蓮聖人は懇に敎へられたり（喝采）然るを何の不足ありてか別勸請を敢てするぞや、聖人の御指南に從ひ日の宗旨を信ずべし、印度は月なり支那は星なり我が大日本は戰勝興國の今日當にこの日の意味を有する聖人の敎を信仰すべきなり（大喝采）

次に石川氏は帝釋が狐を拜したる御妙判ありとて只の狐にあらず拜むも可なりと稻荷を辯護する由、尤も身延御書には天帝と狐の故事を引かれたり（これより天帝が狐を拜し聽法せし因緣を述べらる）これは狐を尊ぶにはあらず法を尊ぶべきことを敎へられたるなり、法尊きが故に尊き法を持てるものは形はたとへ畜生なりとも卑めてはならぬといふことを敎へられたる義なり、然るを旨引に援き來りて狐を禮拜すべき證文とするは何事ぞや

次には佛像を破毀せば不具者が出來、ホコラを毀ては火災に

羅るといへり、然るに見よ予の如き迷信を退治すると今に十有一年その間御札を破りホコラを撤回せしむると無數なり、而して十年前までは予の身体痩せたりしか爾來健全を如へ今はこの通り肥滿して少しも病なく醫士が無病を保險する程になれり、これ豈に石川說とは正反對の事實にあらずや、諸君以て奈何となすや（大笑喝采）彼れはかゝる迷信邪說を鼓吹して徒らに愚民を惑はす、故に一言その邪迷を諭さん、例へば賴三樹の如き梅田雲濱の如き幾多の志士が當時の政道を破りてまでも勤王の大事に努めしは偏に維新革命を遂成せんが爲めなりしのみ、日蓮聖人の敎義は即ち王政復古的なり（喝采）戰國時代群雄割據の觀ある淫祠を毀ち迷信を打破すると何の怪む所かこれあらんや、宜しく海內總ての迷信淫祠を取拂ひてこれを赤十字病院等に代用せよ、かくてこそ初めて宗敎革命の實を擧ぐるとを得ん（大喝采）

次に祖師に厄除、開運、眼病、安產、火防等の名を冠らすもの殆んど一十有餘に及べり、石川云くこれは厄年のもの開運を望むもの眼病者妊婦等各種多樣の願望を叶へて信仰に誘引する方便となる故數の多き程宜しと、こは餘りに迷信を鼓吹し過ぎ却て宗祖の神聖を汚すものなり、宗祖聖人は一の本体に多くの名を付けて分裂主義を取るとを否定し給へり、開目鈔上を見よ

いまだ發迹顯本せざれば（乃至）一念三千なるべし、かうてかへりみれば華嚴經の臺上十方、阿含經の小釋迦、方等般若の、金光明經の、阿彌陀經の、大日經等の權佛等は、此壽量品の佛の天月しばらく影を大小の器に浮べ給を、諸宗の學者等近くは自宗に迷ひ遠くは法華經の壽量品をしらず水中の月に實の月の想をなし或は入て取んとをもひ或は繩をつけてつなぎとどめんとす、天台云く天月を識らず但池月を觀ず等云々、

これは水中に浮べる散体分身の迹佛を天月たる本体の本佛に

統一せられたる聖訓なり、寧人一期の弘通は散漫分裂せる佛教を統一して人心を唯一の信念に統歸せんと努められたるなり(喝采)然るにこの本旨を無視して宗祖に多くの肩書を付け却て分裂の標本たるが如き觀あらしむ豈に慨嘆せざるべけんや、例せば不孝の子が破落漢となり詐欺師となり盜賊となりて親の名を汚がし、ゴロッキの親、詐欺師の親、泥坊の親などと親に惡名を付するに異ならず、迷信を皷吹する爲め勝手次第に厄除火防安產毒消等の名稱を添へて祖師を毒消代りに使ふとは何事ぞ(大喝采)誠に宗祖を侮辱し奉ると責めても尚ほ餘りあり、かくの如き邪妄祖書の中何處に示されあるや(喝采)かくの如き邪義を說くが故に或る寺の小僧は師僧に自己の貯蓄せる學資を出してまで日宗知名の敎師を招待して石川說の謬妄を糺さんとを悃願したりと聞く(喝采)これを聞きては誠に感涙に堪へず日宗の革命は實にかかる小僧の中より起らんが、今回傳道會の妄動は慥に日宗の革命を早むるものなりと信ず(拍手大喝采)

本迹一致の誘法に就ては前辯士の說もありしが尙ほ明日本行寺に於て詳述すべし、石川云く顯本法華宗の名は日蓮上人が命名されたるものにあらず勝手氣儘に付けたる名なりと、然らば今反詰して云はん日蓮宗とは何人が命名せしや、これ亦新居日薩が勝手に付たる名にあらずや、かくの如きは畢竟素人論のみ、凡そその宗義の精髓を以て宗號とするに何の不可か之れあらん、委くは本宗綱要を見るべし、彼又云く顯本とは迹門に對していへる語にて只本門の一邊のみを取り取本捨迹するは太だ不可なりと、本宗に於て迹門を捨つるといふことは毫も之れなし何ゞ妄語をいふや須らく本宗綱要を熟讀せよ何處に捨迹すと書けるや(大喝采)捨迹を以て本宗を誣ゆるは何たる迷妄ゞ天目一流と本宗との區別を辨知せざると無學と謂ふべし、彼れは又本宗綱要の始と中と終とを見て皆無茶なり小林本多等は無學なりと誹り、四ヶ條を擧ぐ一には經卷相承とあるを御書相承と改むべしと云々、夫れ吾が日什正師は天台一宗の碩學として夙に其名海內に轟きたりしが宗祖聖人の妙判を見るや忽ち開解發得して法華宗と成り給へり時に年六十七、この高齡を以て敢て宗門の革命を唱道せらる、宗祖の妙判は即ち法華經の實義を說示せられたるもの、これに自己の信仰を捧げて宗祖の法流を廓淸せられたるなり、これ豈に經卷相承にあらずや、二には獨得の妙とあるを非難す、抑も獨得の妙とは一番勝れたるもの平たくいへば飛切ともいふべし、壽量品の事の一念三千の法門は最勝無上の妙義なればこれを獨得の妙と稱す、何の不可か之れあらんや、三には四大格言中禪天魔の條下に可說門不可說門とあるに對し云々し、何等說明を加へず石川たるもの宜しくその理由を述べざるべからず、四には菩薩號と聖人號との事、日蓮大菩薩といふべきを聖人と呼ぶは不可なりといふ、而るに聖人と呼ぶ方正義なり、撰時鈔に日蓮聖人と祖師自から名乘らせ給へばなり(喝采)かく云へば乙御前書の「八幡菩薩といはは〻やうにいはうべし」とある文を引きて菩薩號を主張せん、而かもこれを以て詮時鈔の明文を否定し得ざるべし、或る說に曰く菩薩號は人爵なるが故に採らずと、予はこれを是認せず忝くも皇室より賜りたる菩薩號なれば門下としては大に感謝すべきなり、されゞ聖人を聖人と稱すると最も正當なり、迹化の菩薩は仍居賢位と釋し本化は聖位に在り本化の上首たる宗祖を聖人と稱し奉ると寔に所以ある哉、識者それこれを思へ尙ほ論ずべきと多々あれども明日本行寺に於て述べん、本日はこれを以て閉會とすべし

* * * * * * *

さて翌十六日の山崎町本行寺に於ける演說會は雨天なりしが前日に劣らず定刻前後に群集し來れるもの無量一千餘名、この日も石川氏等來會せり、定刻に至り鳥越君「開會之辭」を述べ次に「日蓮聖人の本尊論」梶木日種師、「惜哉日本佛敎の亂脈」淸田日暢師、「早く改悔せずんば千載の恨あり」山本容廣師、通じて凡そ二時間各々長廣舌を振ひ、最後に能仁事一師登壇、前日に引續き大々的折伏の論鋒を以て二時三十分間演說あり、その大要次の如し

演題前日に同じ

能仁事一

前日に引續き現日蓮宗の邪義を論告せん、本題に入るに先だち現に茲に來會せる石川君に一言忠告し置くべきとあり、石川君は過日來各地を巡敎し到る所に嘘をツキ、問答事件に就ても嘘をツケり(拍手)僧としては別して嘘をツクは宜しからず、元來此人の人格は信用し難き故頓著せずに打過さたるも日宗傳道會の講師として大ホラを吹廻り邪義を募るより遂に傳道會を相手として吾が篤信會より討論の事を申入るゝに至れり、その顚末は昨日已に詳細報告せし通再三吾が篤信會より傳道會へ書面を以て督責したる結果昨日漸く定約締結委員を通告し來れる次第なり、然るに石川は稻荷妙敎寺に於て嘘をツイて曰く顯本より問答を申込たる故直に承諾せり、然るに顯本より何の答もせず腰を拔かして今に返事なし云々、予は現に腰をも拔かさず此通り起立して居る(大笑)何の答もナイ處てなく再三書面を以て先方に交渉を續けたり、如斯事實を枉げて嘘をツクとは餘りホラの吹き樣甚しきに過ぐ、今石川が稻荷にて演說したる要點を書付たる投書を讀上げて彼の虛僞を戒めん、若し尙ほソンナ嘘は言はぬといふならば現に稻荷にて彼れ演が說を聞きたる人々が幸此處に來會せる故(その一人なり、と呼ぶものあり、喝采)それ等の人々に就て實否を確めん

(これより稻荷傳道會中立より郵送し來れる投書を讀み上げ、一々その僞妄を反駁せらる、滿場拍手大喝采、石川は低頭して一言もなし、投書の文拙なれども又良く石川の口吻を寫すと妙、今は繁を厭ふて錄せず)

是より本題に入らん、宗祖の語に「人路を作り、路に迷ふ者あり、路を作る者の罪と成すべしや、良藥を病者に授く、病者醫を輕しめて服せずして死せば良醫の失となるべしや」とあり、現日蓮宗の邪義なるは決して宗祖の罪にはあらず、これ全く宗徒が聖人の敎訓に乖き苟且偸安にして道を守らず成佛を願はず、僧は法を賣り信者は迷信に耽けり、寺院の須彌壇は塵埃に委し去り毫も顧みざるは、豈に不法不義にあらずや(喝采)曾て姬路より某陸軍中佐當寺に來れるとあり、この御寶前に詣て所感を述べて曰く、斯の如く大本尊の御前に几帳を懸けられあるは誠に殊勝なり、これ恰も軍人が聯隊旗を尊崇すると同一の意なり、聯隊旗は軍人に於ける本尊なりと云々、又我國の諸學校に御尊影を守ると最も鄭重を極む、世間尙ほ然り、而るを獨り現日蓮宗が本尊を粗畧に扱ふは何の意ぞや、石川君は塵埃に塗れたる金綺羅の木像を悅び蓮昌寺には提婆達多の像が鼠に引き去られたるがこれだに揃へば本尊として一も不足なしといへりと、かくの如き迷說に惑はさるゝ爲め遂に聖人の宗門を誤るに至るなり、これ固より聖人の罪にはあらず迷ふものの罪なり惑はす者の罪なり豈に寒心せざるべけんや、予は即ちこの迷妄を糺さんが爲め雜亂勸請の非義なるとを示さん

凡そ法華經全典に涉りて仔細に檢閱を遂ぐるに信仰に二心を許せる文一も之れ無し(喝采)然るに現日蓮宗の僧侶は僅か二十五錢の布施にて一部經を走り讀みするが故に經文を熟知せざるならん(大笑)諸君が日常讀誦する自我偈の中に「一心欲見佛不自惜身命」とあり、一心に佛を見奉るとあるなり二心欲見佛三心欲見佛とは說かれず(喝采、笑)佛陀世尊は信仰を一心にせよと敎へられたるなり、又吾人が合掌するは何の表示ゞや、即ちこれ散亂を止めて心を一にするものにあらずや宗祖示して曰く

須らく心を一にして南無妙法蓮華經と我も唱へ佗をも勸んのみこそ、今生人界の思出なるべき(持法華問答抄)

日蓮は日本第一の法華經の行者なり(乃至)靈山へまゐまして艮の廊にて尋ねさせ給へ必待ち奉るべく候、但し各々の信心に依るべく候、信心だに弱くばいかに日蓮が弟子檀那と名乘らせ給ふともよも御用ひは候はじ、心に二ッましまして信心だに弱く候はば峰の石の谷へころび空の雨の大地へ落ると思食せ、大阿鼻地獄疑あるべからず、其時日蓮を恨みさせ給ふな返す〳〵も各の信心に依るべく候(波木井書)

かく宗祖は二心三心を戒められたり、然るに現日蓮宗の僧徒はこれを思はず却て雜亂勸請を皷吹して信者を惑はすその罪正しく僧侶にあるなり(大喝采)彼等は毫も信念なく法を說くにも聲に力なし、信仰なきものは假令聖典を讀めばとて決してその意を味識すると能はざるなり、信仰なきものはいかに千經萬論を讀むとも到底眞意を消化し得ずこれ等は胃病學者と謂ふべし(喝采)予は妙法曼陀羅供養抄等を示して大本尊の尊重すべきものあるとを訓へん

妙法蓮華經の御本尊供養候、此曼陀羅は文字は五字七字にて候へども三世諸佛の御師、一切の女人の成佛の印文也冥途にはともしびとなり死出の山にては良馬となり、天には日月の如し地には須彌山の如し、生死海の船也成佛得道の導師也、此大曼陀羅は佛滅後二千二百二十餘年之間一閻浮提之內には未だひろまらせ給はず(妙法曼陀羅供養抄)

爰に日蓮いかなる不思議にてや候らん龍樹天親等天台妙樂等だにも顯はし給はざる大曼陀羅を末法二百餘年の比はじめて法華弘通のはたじるしとして顯し奉るなり、是全く日蓮が自作にあらず多寶塔中の大牟尼世尊分身の諸佛すりかたぎたる本尊也、されば首題の五字は中央にかゝり四大天王は寶塔の四方に坐し、釋迦多寶本化の四菩薩肩を並べ普賢文殊等舍利弗目蓮等坐を屈し日天月天第六天の魔王龍王阿修羅、其外不動愛染は南北の二方に陣を取り惡逆の達多愚癡の龍女一座をはり、三千世界の人の壽命を奪ふ惡鬼たる鬼子母神十羅刹女等、加之日本國の守護神たる天照太神八幡大菩薩天神七代地神五代の神神、總じて大小の神祇等體の神つらなる其餘の用の神豈にもるべきや、寶塔品に云く接諸大衆皆在虛空と云々、此等の佛菩薩大聖等總じて序品列坐の二界八番の雜衆等一人ももれず、此御本尊の中に住し給ひ妙法五字の光明にてらされて本有の尊形となる是を本尊とは申す也(日女抄)

大本尊の中には佛菩薩諸天諸神一人もモレズ住し給ふと示さる「モレズ」とあるに注意を要す、然るを何の不足ありてか雜亂勸請をなして狐を拜まねばならぬといふや、然し強て雜亂勸請を好むならば何ぞ速に日蓮聖人の宗門を去て稻荷宗とならざる(喝采)高松稻荷に末舍七十七あり今稻荷山にて賣出しつゝある末舍月番畫圖を示さん、この中に緣引天王離別天王妻取天王等あり男女の愛情に就てこれ等淫祠を迷信するなりかゝるものを辯護するとは抑も何の意ぞや、思ふにこれには必らず云々あらん(喝采)予は今回の討論會に於てかゝる雜亂勸請を極力糺明せんと欲するなり

次に本迹論を述べん、本迹一致といふは三百代言的のグズリ論法なり、一致といふ語は妙判中一ヶ所も之れ無し、詳く云へば本迹一致なりとは妙判中に一ヶ所も列續の文なきなり、之れに反して本迹勝劣の文は多々之れ有り、次に列擧して敎ゆる所あらんとす

開目鈔上に曰く、此等の經々に二ッの失あり、一には存二ル行布一ヲ故ニ仍ヲ未レタ開レ權ヲ迹門の一念三千をかくせり、二には言ニ始成一ヲ故ニ曾ヲ未レタ發レ迹ヲ本門久遠をかくせり、此等の二ッの大法は一代の綱骨一切經の心髓なり、迹門方便品は一念三千二乘作佛を說て爾前二種の失一ッを脫たり、しかりといゑどもいまだ發迹顯本せざればまことの一念三千もあらはれず二乘作佛も定まらず、水中の月を見るがごとし根なし草の波上に浮るにことなり、本門にいたりて始成正覺をやぶれば四敎の果をやぶる、四敎の果をやぶれば四敎の因やぶれぬ、爾前迹門の十界の因果を打やぶりて本門の十界の因果をとき顯す、此即本因本果の法門なり、九界も無始の佛界に具し、佛祖も無始の九界に備て、眞の十界互具百界千如一念三千なるべし

かく迹門は獨立し得ずして全く本門の体內に歸入するなり、こは佛界の敎訓なれば只仰て信ずべきのみ(喝采)或僧は吾宗が前四卷を捨つと誣ひ捨劣得勝を振廻はせどもこれ全く事實を誤れるなり(喝采)

十法界抄に曰く、本門顯れ覓れは則二種俱に實なり(已上)

此釋の意者本門未だ顯れざる以前は本門に對すれば尙迹門を以て名けて虛と爲す、若本門顯れ已ぬれば迹門の佛因は即本門の佛果なるが故に天月水月本有之法と成りて本迹俱に三世常住と顯るゝ也、一切衆生の始覺を名けて迹門の圓因と言ひ一切衆生の本覺を名けて本門の圓果と爲す、修一圓因感一圓果とは是也、是の如く法門を談ずる時迹門爾前は若本門顯れざれば六道を出てず何ぞ九界を出ん耶

藥王品得意鈔に曰く、第四に日の譬は星の中に月の出たるは星の光には月の光は勝とも未た星の光を消さず、日中には星の光消ゆるのみに非ず又月の光も奪て光を失ふ、爾前は星の如く法華經の迹門は月の如し壽量品は日の如し、壽量品の時は迹門の月未だ及ばず何に況や爾前の星をや、夜は星の時月の時も衆務を作さず夜曉て必す衆務を作す、爾前迹門にして猶生死を離れ難し本門壽量品に至て必す生死を離る可し

爾前と迹門は猶ほ生死を離れ難し、則ち成佛し得ざるなり、本門壽量品に至て必らず生死を離れて成佛得脫するなり、さればこそ本門の敎効勝れたると日の如しと譬へられたるなれ豈に偉大ならずや、しかも尙ほ本迹一致なりといはゝこれ實に外道の說にあらずや(喝采)

常忍抄に曰く、壽量品を木に譬へ爾前迹門をは影に譬ふるの文なり、經文に又之れ有り、五時八敎當分跨節大小の益は影の如し本門の法門は木の如しと云々

本迹を木に例へば本門は木にして迹門は影なり、しからは寫眞と本体とを同一なりといふが一致者流の說なり、石川は未だ本迹論に付ては充分にその說を吐露せず故に予は本迹一致の謗法を論すと題して彼等か今少し本迹論を勉強し研究するやう論すなり(喝采)

本尊鈔に曰く、又本門に於ても序正流通あり、過去大通佛の法華經より乃至現在の華嚴經乃至迹門十四品涅槃經等の一代五十餘年の諸經、十方三世諸佛の微塵の經々は皆壽量の序分也、一品二半より外は小乘敎邪見敎得道敎覆相敎と名く、其機を論ずれば德薄垢重幼稚貧窮孤露にして貪瞋に同じき也、爾前迹門の圓敎すら尙ほ佛因に非ず

迹門は小乘敎邪見敎未得道敎覆相敎といはれ、其機類は德薄垢重幼稚貧窮孤露にして貪瞋に同じと說かれ、尙ほ佛因に非ずと敎へらる、一致者流よ宜しくこの妙判を見聞して目を醒すべきなり(喝采)

治病抄に曰く、設ひ法華經をもつて行ふとも驗なし經は勝れてをはしませども行者僻見の者なる故也、法華經に又二經あり所謂迹門と本門となり、本迹の相違は水火天地の違目也、例せば爾前と法華經との違目よりも猶相違あり、爾前と迹門とは相違ありといへども相似の邊も有ぬべし、所說に八敎あり爾前の圓と迹門の圓は相似せり、爾前の佛と迹門の佛は劣應勝應報身法身異れども始成の邊は同じきぞかし、今本門と迹門とは敎主己に久始のかわりめ百歲のをきなと一歲の幼子のごとし、弟子又水火也土の先後いうば

かりなし、なを本迹を混合すれば水火を辨へざる者也、(乃至)今日蓮が時具さに起れり、又天台傳敎等の時の三障四魔よりもいまひとしをまさりたり、一念三千の觀法に二あり一には理ユには事なり、天台傳敎等の御時は理也、今時は事也、觀念すでに勝る故に大難又色まさる、彼は迹門の一念三千此は本門の一念三千也、天地はるかに殊也こと也と、御臨終の御時迄御心へ有るべく候

本迹の勝劣を明めざるものは水火天地の相違を辨へざる痴漢なり、百歳の翁と一歳の幼子の如き大差あり、觀念又勝劣あるなり、臨終の時心得べしと敎へられたるを一致者流は生存しつゝある内に己に本迹を混同せるは外道にあらずして何ゞ(喝采)

難易抄に曰く、日蓮讀て云く外道の經は易信易解小乘經は難信難解小乘經は易信易解大日經等は難信難解大日經等は易信易解般若經は難信難解なり、般若と華嚴と涅槃と法華と迹門と本門と重々の難易あり、問て云く此義を知て何の詮か有る、答て云く生死の長夜を照す大燈明元品の無明を切る大利劍は此法門に過ぎざる歟

本門の勝れたるとは生死長夜の闇を照す大燈明元品の無明を切る大利劍なればなり、然るに如何に迷へばとて本迹一致といふや是れ蓋し惜むらくは彼等一派の學問の系統惡きが爲め遂にかゝる迷妄の說に固執するなり、この本迹勝劣の根本義を明確に心得ざるより延いて本尊の正義を誤り雜亂勸請を敢てするに至れるなり(喝采)本門の大法は迹化他方の菩薩すら尙ほ弘通に堪へず故に涌出品には佛は迹化他方を制止して止善男子と述べ給ふ即ち日向記に曰く

止善男子の止の字は日蓮門家の大事也可レ秘々々惣して止の一字は門家の明鏡之中の明鏡也口外詮なし、上行菩薩等を除ては總て餘の菩薩をば悉く止の一字を以て成敗せり

本門の大法は只本化の菩薩のみ弘通の大任を帶び給へり、されば上行菩薩は日蓮大聖人として我國に應現し四大格言を唱道して此の大法を弘通し佛敎統一の大業に從事せられたり、以上の妙判を明解せば一致者流の謗法たると自から明瞭ならん、彼等須らく菩提心を起して速にその迷妄を改悔せよ云々

(以上能仁師演說)

右演說了るや本宗の萬歳を三唱し閉會を告げたり、この日或る日宗信徒は閉會後會場に於て石川氏を圍みて氏の萬歳を唱へ兪耶する所ありしかば警官は氏の歸途を危ぶみ護送せんかといへる程にて往時の石川將軍とは違ひ意氣頗る消沈せるは氣の毒に見受たり、要するに昨今兩日の演說は大ホラを吹き廻れる石川氏の面前に於て忌憚なくその虛妄邪說を呵責せしとて一般聽衆も大に滿足を表したり

翌十七日は討論定約委員會合の日なり、この日山陽中國の二紙を始め大阪朝日大坂時事の各新聞にも本件に關する記事を掲載せり繁を厭ふて錄せず、是より先き本會に書を遣り又は自ら出頭して論討の當日傍聽者として其席に列せんとを申込むもの頻々たり、而かも定約案決定の上ならでは傍聽者の數を定め難く到底總ての申込に應じ難き狀態にてありき、さてこの日午後一時より市內東中山下の山左樓に双方の委員會合し、當方よりは久城、須山、並に宇垣代鳥越勘一の三氏臨會し、傳道會よりは河本、大賀、間部(蓮昌寺徒弟)の三氏會合し、中國民報社員又來り議す、即ち當方より誓約書の案文を提示し協會せしに「本門の本尊以外に別勸請を爲すは本意に適ふや否や」といへる論目に至て双方意見を異にし、彼れは「本尊の實義」を論目とせんといひ、若し別勸請問題を論目とするならば大賀氏の如きは委員を辭せんと主張するに至り、當方委員は則ち「本尊の實義、但し本門の本尊以外に云々」といふ折中說を提供せしが彼れ尙ほ肯せず彼此討議中、突然岡山警察署長泉警視臨監せられ委員に告げて曰く、今回の事件は實に縣下宗敎界の一大問題にて市內は勿論近鄕近在到る處

大評判となりたれば討論會の當日は定めて雜踏を極むべきとと思料す、而して予が經驗に據れば法論は常に相互確執を生じ圓滿に結局せず、これ甚だ憂ふべき現象なれば本件に就ても予の意見を特に上官に具し同意を得たる故、今諸氏に謀る所あらんとす、即ち本件は此儘に中止するとしては如何、諸氏幸に予が言を容るゝならば向後本件に對しては双方孰れも是非勝敗を云はざらんとを望む、之れ予が今日茲に來會し適人として注意せんと欲する所なりと、委員は熟議の末遂に署長の注意を容るゝとなり、茲に討論事件は一段落を告げたり、この中止の報傳はるや中には失望不滿を唱ふるもあり多少辨別力あるものは本會が開きたる兩日間の演說を聞きて敎義の曲直を判別し討論を聞くまでもなく己に滿足せりといふに至れり

然るに傳道會側に於ては尙ほ自義を募らんと欲して、二十一日午後一時より大福座に於て二十二日は蓮昌寺に於て對抗演說會を催ほし、間部昌孝、安國一審、矢吹日廣、石川惺亮等專ら人身攻擊演說を爲せしかば益す社會の同情を失ひ、演說閉會の翌二十三日傳道會長高見日昌は岡山警察署へ召喚せられて注意を受くるに至れり、今山陽新報の記事を揭げて此間の消息を傳へん

●坊主喧嘩に就き　頃日岡山市に於ける顯本法華對日蓮宗の爭論は激昂の極に達し遂には双方の信徒の討論を開始して宗義の是非を決せんとまで力味出し旣に過般山佐樓に於て双方の會見討議を爲さんとせし際泉岡山署長は不穩當の所爲と認め臨監の上一個人の資格を以て仲裁說を提出し仝會を中止せしめたるに其後顯本法華派にては日蓮派が應對の議論を爲し能はざるに窮し暗に之を避けんがため窃かに泉署長を訪問して該會見討論を中止せしむるの義を懇囑したるものゝ如く疑ひ且つ泉署長も之に因て仲裁せしものならんと臆測し彼是非難し居りし由を耳にせし日蓮派は心中快からざりし折柄日蓮派に對しては無名の書面を以て討論を促し來るものあり或は顯本派に憶したるが如く稱して罵倒し來るもの絶ねざるの有樣に日蓮派の僧徒等は甚しく憤慨し遂ひに一兩日前大福座及び蓮昌寺に於て佛敎演說會を開きしが其際石川某を除くの外數名の辯士は悉く自派の法義を說くに非ずして敵視せる顯本派の僧徒を罵倒するのみにて終始人身攻擊を以てせり萬一一方の告訴等起らんか由々敷失体を來する虞あり兎に角不穩の兆候なきにあらずして岡山警察署にては常に注意警戒を怠らざりしが日蓮派は尙ほ不日演說會を開く趣きなれば前仝樣人身攻擊を爲すが如きことは容易ならずとし豫め警告を與へんとて岡山署には昨日午前日蓮派の蓮昌寺住職を招き泉署長之に面接し仝派が過日來開會の演說は總て宗敎本義の要旨を議論するにあらずして人身攻擊を專らとし甚だ不穩の狀態を呈せるに付爾來注意あるべしとの警告を與へたりと云ふ

又同日の中國民報にも左の記事あり、演說會の分と共に拔載せん

●蓮昌寺住職注意を受く　曩に當市に於ける顯本法華宗篤信會と日宗傳道會とは法論を闘はす爲め東中山下山佐に於て雙方の委員會合し協議せる折柄泉警視より仲裁ありて調停に至りたるが其後蓮昌寺派にては大福座及び蓮昌寺に於て兩日間佛敎演說會を開き本行寺住職能仁事一氏に對し口を極めて人身攻擊を爲せしより岡山警察署に於ては昨日午前九時蓮昌寺住職高見日昌氏に出頭を命じ注意する所ありたる由

●佛敎大演說會　當市の顯本法華宗篤信會にては日宗傳道會が過般兩日間大福座及び蓮昌寺に於て開催したる佛敎大演說會は法義を逸して人身攻擊を爲したるものなれば群生を濟度するの必要ありとて之れに對抗する爲め明廿五日午后二時より山崎町本行寺に於て佛敎大演說會を開催する由

なるが辯士は能仁事一、梶木日種、熊代觀了（元蓮昌寺院代）松崎事成四氏なりと云ふ

かく傳道會に於て迷信者流を惑はすと弥よ强烈となりしかば本會はその迷蒙を啓導する必要を認め更らに二十五日を卜して本行寺に於て大演說會を催すことはなれり、演說會の廣告手續は前回に同し又山陽中國の二紙に各百二十行の大廣告を掲げぬ、さらでだに今回討論の中止といひ、傳道會側の人身攻擊といひ前回にも增して大に社會の耳目を聳動せる上に蓮昌寺の院代たりし熊代觀了氏が傳道會に於て夙に改革を企てたる一人なりしが、今回の事件に我が篤信會に內通せりとの嫌疑を以て本月十七日蓮昌寺より擯出せられ以來本會に來り投じてこの演說會に出席するとなりたれば、層一層熱情を加へ來り當日は定刻（二時）前より聽衆千有餘名本行寺に廣集し遂に能仁師の演說中に本堂椽側東南の部分墜落するに至れり而かも幸にして無事閉會を告げたり、その演題等左の如し

敎相の勝劣を論ず　松崎事成師
正境正信　熊代觀了師
理想的宗敎　梶木日種師
現日蓮宗の雜亂勸請を駁す　能仁事一師

本會にては對傳道會の運動を右演說を以て一段落とし、更らに來る六月二日より一週間本行寺に於て祖書講義會を開催し今回の問題となりたる本尊論本迹論を講題とし能仁僧都を講師として毎日午後八時より開講、篤志者は何人にても會費を要せず、參聽し得る旨夫々廣告を爲せり、嗚偉大なる哉之れを要するに今回傳道會の妄動と石川の演說は一部迷信者流を動かすに至りたるも大に社會の同情を失ひ識者の嗤笑を招き結局世人をして雜亂勸請の非義なるとを知悉せしむるとを得本宗の光輝は彌よ益す發揮したり、されば石川こそ善知識なれ猪の金山を磨けば益す金光を放つが如し、豈に快心の盛事ならずや、茲に聊顚末を錄して江湖の一粲に供ふ

▲千葉縣通信　新治村戰死者追悼會　第五敎區第四部新治村各寺院（萬光寺、圓德寺、法雲寺、正立寺、能泉寺、蓮花寺、大澤寺、安立寺、圓能寺、光明寺）住職及信徒の發起にて明治卅七八年役戰死病歿者特には同村出身兵士（多田淸助、關屋春次郎、高石良司、渡邊吉太郎弟）の英魂追悼大法會を萬光寺に於て擧行せり大塔婆一基本堂の正面に造立し本堂の壯嚴美を盡し供物山の如く大導師は伊藤寶樹師發起人惣代追悼諷誦文――齋藤義監師各寺住職總代追悼文――米倉義明師追悼文――尙兵會長伊東七太郎代讀新治村村吏の追悼文各區長總代の追悼文遺族の答詞學校職員生徒總代出征軍人總代遺族信徒總代等の燒香あり客僧として金阪學信角田即是兩師出席せり參拜者數百名最も盛大なりき可重なる法會終て導師は遺族に對して要品一部づゝ授與す庫裡に於て遺族及村吏出征軍人の饗應あり尙兵會より遺族に對して紀念章及木盃を贈る午后六時頃散會せり

宗政雜俎

▲擔當評議員及評議員事務所　第五定期宗會に於て改選せられたる評議員は本月八日第一回集會を催し先つ擔當評議員及評議員事務所を左の如く定め翌九日に亘り住職任免寺院等級改定等數件を審議し散會したり

擔當評議員　山根顯道　全事務所　東京淺草新谷町慶印寺

▲本山信徒總代會議　本宗敎學財團設立の件に就き本月廿三日午后一時より總本山に於て信徒總代會を開會し財團設立式を擧行する筈なり

▲管長猊下の西下　本宗管長本多大僧正には前項財團設立の要務を帶び本月十六日西下せらる

▲管事の改選　三十六年七月三日任命せられたる第一、第十一、第十二、十三、第十五、第十六、第十七、第十八、第十九の各敎區管事は任期滿了に依り第九敎區管事は欽員に就き今回廳令を以て七月一日選擧の旨通達せられ各敎區選擧監督者に於て夫々手續中なりと聞く

饑饉救濟義捐金領收報告（第六回）

〆切迄集金分

靜岡縣

金五拾錢　伊豆伊東妙隆寺住職碧勵光
伊豆伊東妙隆寺檀家　五拾錢鈴木惣左衛門○參拾錢杉山宇之造○貳拾錢宛里見淸助、山下治右衛門、沼田元五郎○拾五錢宛堀井利兵衛、里見源造、同辰藏、木梨又五郎○拾錢宛杉山豊右衛門、同春吉、同捨二郎、同宗吉、鈴木熊太郎、里見喜一郎、同保太郎、同秀吉、山口友右衛門、山下由兵衛、太田爲次郎○七錢山下鐵藏○五錢宛鈴木龜太郎、同千代吉、同信次郎、木梨菊二郎、山田松太郎、深谷政五郎、同福二郎、里見村吉、同秋太郎、同こう、稻木七藏、淺井菊太郎（碧勵光勸募）
遠江白須賀妙泰寺檀家（第二回）　拾錢宛井上かね、加藤信子鈴木すゑ、（高橋遵碩勸募）

岡山縣

金壹圓五拾錢　美作吉ヶ原順正會

千葉縣

金壹圓五拾錢　下總酒々井經胤寺住職綿貫善晥、金參圓也仝經胤寺檀家中、金五拾錢仝大袋大經寺住職寺田善海、金壹圓仝大經寺檀家中、金參拾錢下總高田常眞寺住職松本眞釋
高田常眞寺檀家　參拾錢宛伊藤常太郎、大塚時藏○貳拾錢宛大塚甚右衛門、仝庄藏、高橋浪太郎、仝三之助、仝源之丞、仝治三郎、仝貞吉、石井七之助、伊藤定吉○拾五錢宛齋藤瀧藏、石井平兵衛、仝啓藏、仝健吉、大塚長吉、仝彌之吉、高橋文藏、仝福次郎、仝忠藏、○拾貳錢大塚喜三郎○拾錢宛高橋良助、仝求之丞、仝富次郎、仝太一郎、仝八十八、大塚勇三郎、仝由良吉、仝巳之松、石井兼藏、仝仁平、仝貞藏、齋藤久兵衛、仝甚太郎、仝惣左衛門、森倉鈴之助○五錢齋藤勝太郎

合計拾七圓七拾九錢

通計六百五拾四圓五拾八錢五厘也

正誤　前號第三十三頁大阪堂閣寺檀家中和田ハ松田、判之助ハ利之助、松本ハ松木の誤り　同三十四頁二十八行福島石福寺ハ常福寺の誤り

義捐金第貳回送付

募集締切ニ付第貳回分トシテ左ノ通リ各縣ニ送付シタリ

金百參拾圓也（第一回ト通計參百參拾圓也）　宮城縣
金七拾八圓也（第一回ト通計百九拾八圓也）　巖手縣
金五拾貳圓也（第一回ト通計百參拾貳圓也）　福島縣

合計　貳百六拾圓也（第一回ト通計六百六拾圓也）

第五回内國勸業
博覽會褒狀
諸漆製造販賣
東京淺草北松山町
中村捨吉

本團へ送金に就ての大便利

本團は今度振替貯金の口座(口座番號一二一九番)に加入致しましたから本團に送金するに就ては爲替料も書留料も通信費もいらないで、最も確實に最も迅速に送金も通信も出來受取證も取れます、其方法は振替貯金の拂込用紙(本團より差出した用紙に限る)に金額と拂込の年月日と拂込人の住所氏名を記して最寄郵便局(何局でも取扱ひます)に差出しさへすれば本團に屆きます、それに拂込通知票の裏面に通信文記載欄と云ふがありますからそこへ送金の目的を記入しますると何の爲めに送金せられたかゞ直に分りますから別段に『はがき』の通知もなにもいりません、誠に冗費がなくて安全なる方法であります、が此拂込一回に就て貳錢宛の手數料を徵收せられますゆへ、此手數料丈は拂込人に於て御負擔を願ひます、故に送金額の外に貳錢宛を增して御拂込を願ます、拂込用紙は『往復はがき』で御申越次第送付致します

三十九年五月

統一團

脳脊髓
精神病
帝國腦病院
東京市神田區和泉町
(電話下谷七一七番)

院長ドクトル齋藤紀一明治卅三年專門學研究の爲め獨逸へ留學卅六年同大學卒業尙進て英佛專門病院を視察兩院にて診察す

精神病專門
青山病院
東京市青山南町
(電話新橋三六四五番)

本郷
根津
眞泉病院
(電話下谷四三九番)

婦人科產科 醫學博士 千葉稔次郎
醫學士 中島襄吉
內科學博士 野村華造

基礎金領收報告

千葉縣長生郡新治村 追弔會

一金壹圓五拾錢也

右本團基礎金中へ御寄贈相成り正に領收仕候也

三十九年六月

統一團

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
一本誌は一冊六錢十二冊前金六十五錢、郵券代用は一割增但五圓切手を可とす
一讀讀申込の節は住所姓名を明書して認めらるへし
一本誌代金拂込は振替貯金に依らるゝん最も便利とす、拂込用紙は「往復はがき」にて御申越次第送付すべし

廣告料

一頁	半頁	四分ノ一頁	特別廣告
拾圓	六圓	三圓五拾錢	十五圓ヨリ廿五圓マデ

明治卅九年六月十五日印刷發行

發行人 井村恂也
編輯人 山根顯道
印刷人 鈴木暲學
印刷所 北澤活版所

東京市淺草區南松山町四十五番地
發所行 統一團

統一